
DEVIL HEART ruined 第3幕

ジャンクラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DEVIL HEART ruined 第3幕

【Nコード】

N2409W

【作者名】

ジャンクラ

【あらすじ】

DEVIL HEART ruined 第3幕です。またまた

長くなると思いますがお付き合いください。

1話「はぐれ者の話」

その光が本物だと信じていた。

差し伸べられた手を握り返すことに、疑問など持たなかった。

この薄汚れた牢獄から救い出してくれるという言葉を、疑いもしなかった。

今考えれば、何もかもが終わった後に思い返せば、その全てがひどい過ちだった。なぜこれほどまでに自分が簡単に騙されてしまったのか　自らの愚かさに吐き気さえこみ上げる。

全ては嘘だった。

光は幻だった。

差し伸べられた手などなかった。

牢獄の扉を開くための鍵は、自分たちを殺すための爆弾だった。

自分たちがその組織にとってはただの捨て駒であり、その命すら取るに足らないものであることに気付かされた時には、全てが手遅れだった。

絶望の先に、光などなかった。

カビの臭いのするエアコンと、小さな明り取りの窓の他に、その部屋には一脚の丸椅子とくたびれたベッドしか置かれていない。

茜色に染まった空は部屋の中に、版画を刷ったような彫りの深い影を落としている。

あたりはひどく静かだった。ささやかな鳥の声だけが絶えず聞こえてくる。部屋の前を車が横切った。盛りのついた猫のうなり声が響いて、空に爆ぜる。

黒城レイはベッド脇の丸椅子に腰掛け、漫画の単行本を読んでいた。父親の部屋から内緒で持ち出してきたもののうちの一冊だった。肩甲骨のあたりまで長く伸ばした金髪に時々指を通し、前髪を止めたヘアピンをいじりながら、レイは黙々と読書が続ける。足元に置いたデパートの紙袋の中にも漫画が積み重なっていた。

無類の漫画好きである父親や妹とは違い、レイはこれまで漫画というものをあまり読んだことはなかったのだが、なぜか今、急に手に取りたくなった。父親の、妹の、考えていることの一端に触れなくなっただのかもしれない。

どこか遠くで救急車のサイレンの音がした。命を運ぶ音が、夕闇に溶けていく。

漫画を読んでいる間は、胸を衝く憎悪や怒りや悲しみといった、負の感情から遠ざかることができるような気がした。ページの中に広がる世界は自分の立つ場所からひどく乖離していた。それがとても心地よい。現実逃避と言われればその通りだが、今のレイにはその時間が必要だった。

物音を耳に捉え、レイは漫画を閉じた。ベッドのほうに視線を移す。そこで眠っていた天村佑が目を開け、じっと天井を見つめていた。額には脂汗が浮いている。心なしか、呼吸も荒いようだ。

佑は視線だけを動かしてレイを見た。レイは身を屈め、読んでいた漫画を紙袋の中にしまう。代わりに青いハンドタオルを取り出した。それで優しく叩くようにして、佑の額に浮いた汗をふき取ってやった。

「明日の朝には、この場所を出ましょう」

レイの提案に驚くこともなく、佑はそっと目を伏せた。何かにひどく裏切られたかのような、悲しげな眼差しだった。レイは幼い子どもをあやすかのように、彼のくせつ毛を軽く撫でてやった。

「マスカレイダーズは私たちの敵でした。もう、あんな組織信じられません。だから今度は私たちの手で、悠を守らなくちゃいけないんです。お兄さんと、私の力で」

膝の上に置いたもう一方の拳がひどく震えた。それが怒りのせいなのか、それとも武者震いというものなのか、自分でも判別がつかない。

レイは決意をしていた。ここから先は茨の道だ。今までと変わらぬ覚悟では前に進むことすら困難を極めるだろう。だがそれでもレ

イは戦わなければいけなかった。光を手にするまで、親友の生きる世界を輝けるものとするまで、立ち止まるわけにはいかない。

窓の外に広がる暮れなずむ空を、レイは睨みつけた。ひときわ大きな声でカラスが鳴く。橙に染まる空の果てに、藍と黒の混ざりこんだ色がじわりと滲んで見えた。

タンポポの塔 1

8月の岩手山は、緑に燃えていた。

低地には広葉樹林、中腹には針葉樹林、高地には高山植物といった多種多様な山容をもつのがこの山の特徴である。点在する沼地や岩壁は其中で絶妙なコントラストを生み、多くの人々を魅了している。気圧は少しばかり高く、空気も少しばかり薄く、気温も平地よりは若干低くて過ごしやすい。

岩手山は壮大で美麗な外見とは裏腹に、傾斜はきつく、足元も頼りないため登るのには一筋縄ではいかず、上級者向けの山として知られている。最もポピュラーな登山口である馬返しから入山しても、往復8時間以上はかかるといわれ、同時に運動量も多く、屈強な山としての側面も持ち合わせている。

そんな岩手山の中腹辺り、木々に目を向けるのならば、広葉樹林帯から針葉樹林帯に移り変わろうとしている場所に、一軒の小屋があった。

人目を偲び、こっそりと建設されたにしてはその小屋はしつかりとした造りをしていた。三角の赤い屋根に、伐採してまもない木材を組み合わせたような、きめの細かい壁面。掘っ立て小屋ではなく、おざなりではあるが、きちんと礎石があり、建物は地面より一段高い位置にあった。地面から入り口のドアまでは段差の低い階段で繋がっている。急ごしらえという気配はなく、それなりの期間を要して建てられたということが窺い知れた。

その小屋を臨む位置に、古ぼけた塔が建っている。壁面に使われている素材の劣化により、褪せた色をしたその塔もまた土地の管理者に許可されたものではなかった。窓ガラスはそのほとんどが割れ、残りももれなくすんでいる。階数は外から見る限り20。その頂上は重なり合う木々に阻まれていて、下から見上げることは叶わない、

山道という場所の性質上、土壌が巨大な建設物を突き立てるのに適していないのか、塔は時の流れに晒され、大きく傾いでいた。よりかかる塔の重みでへし折られた木が、小屋の前にいくつも放置されている。塔はいつ倒れてもおかしくはなかったが、その一方で、そこに安定した角度を見出しているようでもあった。事実ここ数年、塔はこの角度のままこれ以上傾ぐこともなく、この状態を維持しているのだ。

塔の周囲は温かみのある黄で染まっている。それは咲き誇るタンポポだった。塔の周囲を嘗め尽くすように潤沢に広がるタンポポの園は、それだけみれば穏やかな景色であるが、どこか異様な雰囲気漂ってモイタ。

その塔の周囲にだけタンポポが寄せ詰まっているのも異常なら、その周囲10メートルを超えると、1つもタンポポの姿が見当たらないのもまた不気味だった。まるでその塔はタンポポによって周囲から隔絶されているようであり、実際、その通りだった。

空は葉で覆い隠されているものの、その間隙から薄日が差し込んでくる。天気は雲1つない晴天。気温も例年に比べてわずかに高い。それにも関わらず、塔と小屋を据える空間には濃い霧が立ち込めていた。

それもタンポポと同様、その一帯のみに限られている。地面より霧が噴出し、塔の存在が周囲に漏れることのないよう、巨大な見える手が囲い込んでいるかのようだった。

そのようにあらゆる意味で、この地は現実から剥離し、拒絶されていた。霧は周囲には鏡のように映り、その塔が人目に触れることの

ないよう、視覚を捻じ曲げる役割を果たしている。だからこの塔に近づくことはおろか、目撃することさえ、多くの人間には許されない。許可もなく、そしてその問題が露見することもなく、塔と小屋が存在し続けられるのもそのおかげだった。

この塔へ接触することが許される者はごく一握りだ。そしてそこに含まれる者はもれなく、人類を超越した異形のみだった。

その隔絶された地に、祈りが流れる。

声の主は少女だった。風でタンポポの花が揺れる。すでに白に変わったものからは細かな綿毛が飛び出し、羽のように宙を踊った。

風は少女の顔をも撫で付ける。その表情を隠している厚いフードがわずかにめくれあがり、少女の悲壮さの宿った眼差しが顕になった。

彼女は白装束を身に纏っていた。

巫女装束と西洋で神事に携わる者が羽織るローブを組み合わせたような服で、袖や襟口の縁には金の装飾が施されていた。またゆつたりとした袖には鳥の翼をイメージした模様が、同じく金色で大きく描かれている。厳粛で精錬された雰囲気を放つその服からは、他者を寄せ付けぬ威圧感がある。それはまさしく法衣であり、彼女は巫女に違いなかった。

少女は小屋の前の広場に片膝をつき、両手を組み合わせた姿勢で、その老朽した塔を見上げている。祈りはその塔に向かって捧げられていた。彼女の仕える神は、おそらくその内部に座しているのだろう。この塔は神聖なる建築物であると同時に、彼女にとっては信仰的であり、神の住まう場所だった。

少女の首筋を青色の髪の毛が滑り落ちる。その肌はわずかに汗ばみ、額から落ちた透明な水が襟を伝っていく。どこか具合でも悪いのか、それとも長時間この姿勢でいるのが身体に負担なのか、少女の表情には疲労が滲んでいた。目の下には黒い陰ができ、頬もこけているように見える。呼吸にも喘鳴が混じり始めているようだ。虹彩には光が薄く、まるで蠟の尽きかけた蠟燭の火のような弱弱しさのみ、そこには宿っている。

しかし彼女は祈ることをやめなかった。困憊して尚、その姿勢にはより力がこもったように思えた。一定のフリースを何度も何度も繰り返し口ずさみながら、押し迫った態度で、祈り、願い続けている。それは仲間の無事を祈願してのものだった。

この世には、失うのにはあまりに早い命がある。どうか、あとほんの少しだけでも、天に召されようとするその魂をこの地に結んでおいて欲しい。彼女が彼女自身の神に捧げているのは、そういう類の信仰だった。

風が、埃が、土が、容赦なく少女の体に畳み掛ける。だが彼女は動かない。その睫毛の長く、やつれても変わらずに澄んだ大きな瞳で、縋るように塔を見据えながら、両手に力をこめ、祈祷を続ける。

そんな健気な少女の背中を、小屋の前から不審げな表情で見つめる男の姿があった。

黄色いシャツに黒いパーカー、下にはスキニージーンズを履いている。髪の色は濃い茶だ。耳を隠し、首元に垂らしたパーカーに触れる程度に長い。顎が尖り、唇は薄く、色白な女顔だ。髪の長さも相まって首から上だけ見れば、その相貌はほとんど女性のものだった。「毎日毎日、神頼みか。よくやるよ」

男 真嶋は侮蔑のこもった眼差しで少女を睨んだ。それから腕を組み、背後に顔を向けた。

「まさか、貴様はそんなことをしていないだろうな？」

男の視線の先には、小屋の入り口から顔だけを覗かせる女性の姿があった。レンズの薄いメガネをかけた、いかにも穏やかなそうな女性で、おそらく年齢は30代半ばだと思われた。癖のある髪を後ろで1つに束ねている。女性は男からの追及に一瞬、怯えたような表情を見せた後で、取り繕うように言った。

「私はこれでも医者よー？ 患者さんに対してそんな職務放棄をするつもりはないわよー。神様に頼むのは、最後の最後だけよ。それまでは自分の、人の力を精一杯こめるつもりだわ」

「最後の最後まで神任せにしてもらっちゃ困る。僕はオカルトを信じてないのさ」

真嶋が殊更強く鋭い眼光を飛ばすと、女性は必死になって頷いた。真嶋は自分の爪に歯を立て、神に希求する少女を恨みがましく見やる。

「シーラカンスもケフェクスもいなくなった今、父さんを救えるのはこの僕だけだ」

真嶋は呟き、男はまた女性に目をやる。視線を移すと同時に、今度は右足を小屋のほうに踏み込んだ。その手には、いつの間にか、そしてどこから取り出したのか、陽光を映して反射させる、鋭利な高枝鋏が握られている。その切っ先は、女性の首筋にぴったりと突きつけられていた。

「だが、残念なことに僕に医学の知識はない。貴様に父さんの命を預けなければならぬことは屈辱だがな。いいか？ もし駄目だったら、貴様を八つ裂きにしてやるからな。せいぜい、人の力というやつを奮うがいいさ」

首を僅かでも動かせば、鋏は女性の動脈を食い破る。だから彼女は瞬きをするようにして、目で服従を示した。真嶋はそれを読み取ったのか、鼻息を鳴らすと彼女から離れ、鋏を再びどこかに消し去った。

逃げるように小屋の中に引っ込んでいく女性を、悶々とした思いで見送っていると、塔の方から男の声が飛んできた。真嶋はそちらに視線をやり、口の中で小さく舌を打った。

「随分と血気盛んのような、キャンサーよ」

片手をあげ、足を引きずりながら不恰好に真嶋に近づいてくるのは、金髪の男性だった。肌は浅黒く、濃い顔立ちをしている。ノースリーブのシャツから伸びた二の腕はまるで岩のようだ。真嶋は男のほうに向き直ると、彼に詰め寄った。

「こんなところに詰め込まれれば、ストレスの1つや2つ溜まる。これから僕たちはどうするんだ。いつまでこんな山奥に隠れていれ

「ばいいんだ」

「その様子だと、傷の具合はいいらしいな」

軽やかに笑う男に、真嶋は眉根を寄せた。男の言葉には嘲りの色が見えた。

真嶋が苛立ちを吐き出そうとすると、それを制するように、男は手を前に突き出した。怒りが収まらぬままに男の掌に視線を移し、しかし真嶋は息を呑んだ。男は突き出した手に四角い金属板を握っていた。そこには『4』の数字が刻まれている。それは真嶋にとって何よりも大切なものであり、この手に再び戻ってくるのを待ち望んでいたものだった。

「これは、ファルス……ついに修理が終わったということか」

「ああ。ついさっき、な。大体お前のごまかけ要望には答えたつもりだ。カラーリングもあんなペンキじゃなく、ちゃんとした塗料で塗りなおしておいた。感謝しろよ」

「まさにスーパーを越えたファルス。言うなればハイパーファルスというところか！」

「いや、傷を埋めて色を変えただけの、ただのファルスだ」

「いいだろう。ハイパーファルス、この手に受け取った。僕にふさわしい兵器になっていればいいがな」

「まず話を聞け」

男の指摘も一切耳に入らぬ様子で、真嶋は男からプレートをふんだくると、太陽に透かしたり、自分の掌の上に載せたり、久々に自分のもとに帰ってきたそれに心を踊らせている。自分の所有する兵器が、改修されて戻ってきたことが嬉しくてたまらないらしい。

男は苦笑を浮かべつつ、肩をすくめた。

「お前、ここから出たいって言ってたな」

男の言葉に真嶋は動きを止め、首をよじらせた。男が口元に笑みを宿し、言葉が続ける。

「そんなお前にとっては朗報だ。任務がある……あいつからのな」

男は顎をしゃくり、塔の前に跪く少女を示した。真嶋は白装束を

身に纏い、祈りを謳う少女を振り返る。

「任務だと？ この僕に？」

「あの戦いから、つまり俺たちがこの岩手に来てからすでに一週間以上が経過している。だが、マスカレイダーズは尻尾を全く出さねえ。怪人の奴らも姿を潜めているときた。事態は確実に逼迫している」

「そうか……」

真嶋は涼やかな空を見つめた。あの戦い、ホテルの前で演じられたあの死闘からすでに一週間もの月日が経過していることに改めて驚いた。傷を癒すため体を休めている時こそ退屈に感じたが、過ぎてみればあつという間を感じた。

「状況は日に日にやばくなっていくばかりだ。その中でも一番まずいのは、奴らが人質を抱えている可能性があるということだ」

「人質？」

「ああ。あいつの親友だ」

男は声を途端に潜め、ちらと少女を見やった。その目元に憂いを過ぎらせる。

「同じ年の女の子なんだが、行方が分かっていない。マスカレイダーズの手に残っているのかもしれないが……もし、奴らの手の内に落ちているとしたら、不当な交渉を持ちかけられることは間違いない。そうなたらかなりまずい。俺たちに逆転のチャンスはなくなるだろう」

真嶋は頷いた。メンバー個々の人間関係をあまり理解していない真嶋にも、男の顰めた声などから、組織が置かれている現状の危うさは察することができた。

男はデニムの尻ポケットから一枚の写真を取り出した。そこには鮮やかな青髪をポニーテールに結っている少女と、黒髪をロングにしている小柄な少女が手を繋ぎ、こちらに向かってピースサインをしている姿が写し出されていた。どちらも制服姿だ。青髪のほうは今、真嶋の背後で祈祷を捧げている少女に違いなかった。

それはどこかの店先で撮られたものらしかった。真嶋は何となく、この場所に見覚えがあるような気がした。そして黒髪の少女の顔をじっと見つめるうち、真嶋は自分の記憶が正しいことを確信した。

「この娘は……」

「知り合いか？　ならちようどいい。今、俺たちが探しているのはこの娘だ。この娘の存在が、俺たちの命運を左右するといっても過言じゃない。重大な、鍵だ」

「なに？」

「一応、鳥のお面の彼らにこの一週間、捜させたんだがな。一向に見つからない。だが、必ずこつちに連れてこなくちゃならん。すでにマスカレイドーズに囚われているのなら、奪い返さなくちゃいけない。奴らに主導権を握らせたら、あとは滅びの道をたどるだけだ」

男は表情を強張らせ、一息に告げた。真嶋は男から写真を受け取ると、もう1度それに目を落とす。それから顔をあげ、自分よりも少し背丈のある男の目を見た。

「なるほど。つまり僕が東京に行き、この娘を見つけていちゃいちゃすればいいわけだな」

「お前の性癖は分かっている。理解はできねえがな。だが、その娘に変ないたずらはするなよ。あいつの恐ろしさは、俺の比じゃねえからな」

男は顔を歪めるようにして笑んだ。真嶋は曖昧に笑って返した。

「ま、了解した。ちようど、体も鈍っていたところさ。それに、ちっちゃい女の子と戯れることができると思えば、悪くない」

「あまり騒ぎは起こすんじゃないぞ。一応、報告用に、そいつは付けたままにしておくからな。動きは慎重に、だ」

男の先回りしたような言動に、真嶋は舌を打った。するとその足元から紫色の光球が浮かんでくる。それはシャボン玉のような質感を備えていたが、サッカーボール大のサイズがあり、また風に触れると不規則な変動をみせた。

くるくると回転しながら宙を舞うそれには、人間の眼球のような

ものが1つのみ備えられている。瞼がないためにそれは開眼したまま閉じず、球体は真嶋の顔の高さまで浮き上がると、その瞳でじつと、真嶋を熱烈的な視線で見つめてきた。

この奇怪な物体が、“ヤドカリ”という名を持っているということは、数日前に説明を受けていた。真嶋を監視し、また、情報を送受信する携帯電話のような役割をもっている。ここに来てすぐ真嶋は今、目の前に立つこの金髪の男にこれを付与された。

真嶋は怪人だ。この金髪の男や、青髪の少女のように体に石版を埋め込まれた超人ではない。そして石版を所持する者でなければ、塔や小屋のある一帯を覆い隠す霧の中に立ち入ることはできないらしい。

そのため、真嶋や父親の二条、先ほどの女医などが塔の付近に立ち入るためには、このヤドカリを付けることで、いわば仮初の同胞の証を手に入れなければならない。

彼らの庇護を受けるため、しぶしぶ真嶋はこの生物に憑かれることを承諾したが、東京に行つてまで付いて回られるとは思っていなかったので、げんなりする。

「携帯電話は危険だし、いちいち、鳥のお面のやつらに頼るわけにもいかねえだろう。監視と報告。その役目は、こいつが持っている。まあ、別に危害を加えるわけでも、邪魔をするわけでもねえ。ま、気楽にしてりゃあいいんじゃないかな」

「ふん、気楽にね」

真嶋はその目の前をふわふわと漂う不気味な生物に不快を催し、拳で殴りつける。だがその球体は陥没さえしたものの、すぐに衝撃を吸収し、何事もなかったかのように再び漂いだす。まるでゴムボールを相手にしたような感触に、真嶋の気は少しも晴れない。

男は真嶋にパスケースを投げ渡してきた。真嶋はそれを受け取った。どうやら電車で東京まで行けということらしい。もつと効率のいい移動手段はないのかと苛立ちを押し隠しながら尋ねたが、お前の場合はそれが一番いい、と返されれば押し黙るほかない。

「お前には、あいつも期待しているんだ。俺たちの知らない情報を持っているんじゃないかってな。多分、ケフェクスが言い残していなかったことも、たくさんあるんだろ？ それをお前が知っているんじゃないかって、話が持ちきりだぜ？」

男の探るような言動に、真嶋は心中で舌を打った。真嶋ことキャンサーの弟であるケフェクスは1週間前に戦死した。彼は己の持っている情報の全てを提供することを条件に、黄金の鳥の集団に取り入ったのだが、この男が指摘した通り、ケフェクスはある重要な情報を開示することなく墓場の中に持ち込んでいた。

真嶋だけがそれを知っている。だが易々と男たちにその情報を提供する気はなかった。おそらくケフェクスも同じ気持ちであったに違いない。切り札は最後まで自分の中に秘めておくものなのだ。

「ま、それは想像にお任せするさ」

男の顔を見つめ返し、真嶋は鼻を鳴らした。男は唇の片端だけを上げて笑う。

「ま、俺たちはここから動くわけにはいかねえからな。頼んだぜ。向こうにいる仲間にもお前のことは伝えてある。連携しろよ」

「ま、黙って見ておけ。僕の自慢の嗅覚を、みせてやる」

真嶋は不敵に呟くと、プレートを放り投げ、それをキャッチし、男に背を向けた。

「おい、待て」

3歩ほど歩みを進めた早々に呼び止められ、真嶋は興の削がれる思いで振り返った。

「なんだ。いまから気合い十分に歩み出そうとしていたところだったのに。出鼻を挫きやがって」

「そいつは悪かったな。こいつもついでに連れて行ってくれ。力になるはずだ」

男の隣にはいつの間にか、1人の長い黒髪をもつ少女が立っていた。中分けにした前髪からは細い眉がはっきりと見える。鼻筋の通った顔立ちをしていた。

その瞳は鋭く、猛禽のような印象を与える。服装はチェックのスカートに薄い黒のパーカーだ。この年頃の女性にしては背が高い。それに見合うように、胸元をみればそこには豊かな膨らみがあった。真嶋はその怪しげな少女を睨んだ。対する少女は感情を悟らせぬ態度で、無言のまま、じつと真嶋を見つめ返す。その目は澄んでいたが、そこには波立つ気配すらなく、感情の大事な部分が欠落してしまっているような、不安定な感触を見るものに抱かせる。

真嶋は少女を指差し、唾を飛ばした。

「なんだこの小さくない女は！ 僕の力が信じられないということか？」

真嶋の罵倒にも、少女は顔色1つ変えない。白い肌も相まってその立ち姿はまるで亡霊のようだった。男は軽く笑いながら、胸の前で手を振った。

「そういうわけでもない。ただ、仲間がいはいりはマシだと思っとな。お前の力には過信も心配もしていない。それにこの娘もまた怪人だ。名前はナインというらしい。仲良くしてやれよ」

真嶋は少女を見やった。ナインというのはキャンサーと同様、おそらく怪人としての名前なのだろう。全身から醸し出す雰囲気は確かに少女なのだが、その顔立ちや立ち姿は随分と大人っぽかった。少女は相変わらず口を開くことはなかった。その表情は彼女の心情を何も映し出してはいない。それが真嶋には気に入らない。

その人形のような表情を睨み据えるようにしているうち、長い髪と顔の陰に隠れて見逃していたが、少女の首、喉元にタトゥーが彫つてあることに今更ながら気付いた。それが人間の目を象ったデザインだったので、真嶋は鼻白んだ。鳥のお面を被った人間たちにもそれと同じものがある。あの人間たちの正体も謎だったが、この少女の詳細もまたボールに包まれている。怪人、と説明されても納得し難かった。

「ふん、僕は僕でやるだけさ。他の奴の力なんて借りるものか」
だがこの少女が何者であれ、おそらく自分との相性は最悪だろう。

真嶋は無言の少女と睨み合いながら確信する。

真嶋は憤懣やるかたなしに、前に向き直り、足を踏み出した。その後を、がさがたと足音がつけてくる。真嶋は足を止めることも、振り返ることもなく、手の中のプレートの感触を確かめながら、青々と茂る山道を足早に進んでいった。

2010年 8月17日

魔物の話 40

野鳥が朝の訪れを告げる。陽光が窓に射し込み、畳に陰影を落としている。空は晴れ、沸き上がる雲は、さながら子どもがちぎった紙粘土のようだ。

どこからか蝉の音が聞こえてくる。夏の初めと比べればその音量こそ確実に小さくなってはいるものの、いまだ町は生命の息吹で耳障りなまでに溢れていた。

午前8時過ぎ。黒城レイは寝汗に塗れながら目を覚ました。寝巻代わりのTシャツが肌に吸いついて気持ちが悪い。上半身を起こし、襟口を片手で広げ、体に風を通す。だが温い空気が循環するだけのようないきがして、すぐに止めた。

ここまで汗だくになって目覚めたのは、タオルケットにくるまれて眠るのがなんだか無防備に思え、真夏にも関わらず厚手の布団を頭からかぶって寝たからに他ならなかった。

家の中は静寂がひしめいている。まったく無音ではないのにそう感じるのは、これまでであったものがすっぱりと抜け、大きな空洞がこの家に生まれてしまったためだろう。

普段よりも1時間寝坊してしまった。学校があるうがあるまいが7時過ぎには目を覚ますのが自分の日課であったのに、少しずつ、体

内時計がずれていつているのかもしれないと感じた。隣をふと見やるが、そこにレイ以外の別の人の気配はない。

「……おはよう」

小さく呟いてみる。しかし当然のことながら返ってくる声はない。レイはため息を吐いてから身を起こすと、洗面所に向かった。

顔を洗うと服を脱ぎ、汗を落とすためにシャワーを浴びた。熱めのお湯を浴びるとようやく意識がはつきりとしてきた。数分間お湯に打たれてから、簡単に体を洗い、風呂場から出る。水気をふき取り、着替えを終え、長い髪をバスタオルで丁寧に拭きながらリビングに向かった。

立ち入ったリビングはそれが当然のことのようにカーテンが閉め切られ、電気も消えたままだった。朝起きてこの部屋に立つと、この家には自分しかないのだと事実、抗いようもなく対面することとなる。惘然とした表情の父も、やかましいライの声もレイを迎え入れてはくれない。この瞬間が、今のレイには一番辛かった。思わずドアの前で呆然と立ち尽くす。夢なら覚めてほしいと思うが、シャワーのせいで意識ははつきりとしていた。

ここ最近が目覚めることが怖かった。布団に揉まれている間は、夜の静寂に何もかも委ねることができるが、朝日はそんな付け焼刃の妄想を白々と剥がし取ってしまう。しかし夜は夜で寢床につくと、様々なことが頭を過り、あまり深い眠りにつくことは許されなかった。レイは大きなあくびをしながらカーテンを剥がし、陽光を部屋の中に採り入れると、扇風機のスイッチを入れた。風を吐き出し、かぶりを振る扇風機の姿を見つめていると、ライがこの家を飛び出す寸前にみせた、涙を浮かべた表情が脳裏に過ぎった。

なんで私だけいつも仲間外れにするんだよ！ お前なんか絶交だ！ もうこんな家にいたくない！

「絶交、か……」

ぼんやりと宙に言葉を浮かべ、思わず苦笑を漏らす。本当に自分は愚かしいな、とレイは自虐的に思う。寂しさは滲むが、その発端

は自分の所為なのだからどうしようもなかった。ライの怒声が、擦り切れるような叫びが、訴えが、いまでも耳を打ち、その度に胸が震える。しかし後悔はなかった。レイの気持ちとしてはやはり、ライは影に満ちた世界のことなど知らず、日の当たるこの場所で生きていて欲しかった。この世には知らなくてもいい現実というものが、少なからずあるのだから。

レイは扇風機の前から離れると、キッチンに向かった。炊き上がっているご飯をよそい、味噌汁を椀に移し、鮭を二切れグリルで焼く。2人分の食事を用意し、それをリビングのテーブルの上に載せてから、床に這う自分の影を鳥の形に変貌させた。こうすることでレイは怪人としての本領を発揮できるようになる。その影の中から、水面に浮かび上がるような様子で、丸い顔が這い出てきた。それは頭にベレー帽を載せた、3、4歳くらいの幼い女の子だった。

「おつはよー、お母ちゃん！ 今日暑いなー」

「うん。おはよう。ご飯できてるよ」

影の内より元気いっぱいに姿を現したその幼女の名前は、ベルゼバビーといった。

その名からも分かるようにこの幼女は人ではなく、人の死体から生まれた化け物。レイと同様に、“怪人”と呼称される生物だった。彼女は人の姿とは別にその本性である化け物じみた姿もまた持っている。胸に蠅の絵を掲げた、ひどく小柄な怪人だ。

一時期はレイと敵対し、襲い掛かってきたこともあったが、今では彼女はレイを母と呼んで慕っている。それはレイが“最高の怪人”としての力を行使して幼女の心を掌握した結果であり、正に主従関係と置き換えられるべきなのであるが、レイはこの自分の力を少し肯定的に捉えていた。

何よりも、今、この家の中に自分以外の誰かがいてくれるという状況にレイは大いに助けられている。

テーブルの上にはご飯とみそ汁、昨日茹でたほうれん草、そして鮭の切り身が載っている。レイとベルゼバビーは向かい合って席に着

いた。箸をとり、顔の前で手を合わせて「いただきます」と声を揃える。

リモコンでテレビを点け、それから味噌汁で箸の先を湿らせた。薄味が好きなレイは、味噌汁に色が仄かにつく程度にしか味噌を入れない。レイとは逆にとにかく濃い味の好きなライは、いつもレイが料理を作る度、年寄りの食べ物だ、病人食だなんだと文句を言っていたことを思い出す。

ちらりと向かいに座る幼女を窺うと、一体どこから取り出したのか、チューブの豆板醤を味噌汁の中に流し込んでいたのでレイは鼻白んだ。それほどまでに薄いのかと悔しく思うが、残されるよりはいいので無言のままベルゼバビーから視線を逸らす。

「野菜もちゃんと食べなさい」

ほうれん草の入った小鉢をベルゼバビーの方に押しやる。幼女はスプーンで味噌汁をかき回しながら口を尖らせた。

「ぶんぶーん。だって味がしないんだもん」

「素材の味が一番いいんだよ。それに豆板醤はつかじゃ体に悪いって。せめて味付けは、醤油にしたほうがいいよ」

「しょうゆー？」

「うん。醤油。テーブルの上にあるでしょ。それにしなさい」

「うーん、分かったー。おかあちゃんがそう言うならそうするー。ばいばいとうばんじゃん」

幼女は素直に頷くと、豆板醤のチューブを投げ捨て、代わりにテーブルの上にある醤油の入った小瓶に手を伸ばした。レイは何も調味料のかかっていないほうれん草を口に運びながら、その様子を眺める。

咀嚼し、頬杖をつきながら、式原明、という男の名前を頭に浮かべた。それはベルゼバビーが口にした、彼女を作り出した元父親の名前だった。同時にその男は現在、世間を震撼させている連続猟奇殺人事件の犯人でもある。彼は自ら手を下した女性の死体を切り取り、そこから次々と怪人を生みだし、またさらに多くの人間を殺害

して回っていた。

ここ最近は全く動きをみせていないが、ここで終わったとは到底思うことはできない。あの男にとって今は雌伏の時なのだ、と考える方が自然だった。異常な性癖をもつあの男が何を企んでいるのか、その目論見を窺い知るのは非常に難しい。ベルゼバビーはその所在を知らないと答えていた。彼女いわく、式原の居場所を知る怪人はほんの一握りらしく、その一握りの怪人の居場所さえ公にはされていないらしかった。姉妹兄弟といった関係を持っている割には、式原の一味は随分と閉鎖的な集団だったらしい。

式原明は社会的には4年前に死亡している。式原は医者という身分を使つて医療行為を装い多くの人間を死に至らしめていた、まさに未曾有の殺人犯だった。

しかし4年前、佐伯稔充の1人娘、零を車でひき殺したことを警察に自首し、独房に入れられた直後、自ら命を絶った。それが当時のニュースが報じた全てだ。

だがレイは式原明が死んでなどいないことを知っている。そう断言できるのはつい数週間前、式原本人との遭遇を果たしたためだった。爬虫類じみた目つき。乾いた果物のような肌。身に纏った気味の悪い瘴気。思い出すだけで吐き気が込み上げてくるようだ。

インターネットから引つ張り出した式原明の画像は、レイの会った男の相貌とぴたり一致していた。なぜあの男が生きているのか不思議ではあるが、それを考えること自体が無謀である気がしてしまふ。あの男の素性は底知れない暗闇に閉ざされているかのようなからだ。

レイは連れ去られた山奥の小屋の中で、自分が怪人、しかも最高の位をもつ存在であることを式原によって知らされた。さらに愛する息子であるディッキーを罠り殺され、危うく自分も殺されかけた。耳をちぎられたあの姿を思い出すだけで、レイは今でも胸が張り裂けそうになる。今でもディッキーの事を夢に見て、涙を流しながら朝を迎えることも少なくはなかった。

式原の起こした連続猟奇殺人事件による被害者の遺族の姿が、昨日のニュースで報道されていたことを思い出す。彼らは正体不明の敵を恐れ、怒り、自分の身に起きた不条理な出来事に困惑し、悲しんでいた。

人々のやつれ、悲壮感の滲んだ、あまりに痛ましい姿を見る度、レイは齒がゆい気持ちになる。レイは事件の犯人を知っている。顔を合わせたこともある。だが、あなたの家族を殺したのは怪人です、と言ったところで、遺族はおそらく信じようとはしないだろう。

人間であつて欲しい。形があり、法で裁くことのできるような存在であつてほしい。口には出さないだろうが、心の中ではそう思っているし、それが常識であると信じているに違いなかった。

しかし現実には人々の想像をはるかに逸している。世間が都市伝説だと思いこんでいる怪人は実際におり、世間が死んだと確信している人間がその怪人を生み出している。だがきつと、その真相を声高に明かしても、荒唐無稽で不謹慎な話だと突き返されるだけだというのは目に見えていた。だからこそレイのような力のある知る者たちが、知らぬ者たちに代わって奮闘しなければならない。

式原明。

その男こそがレイにとって、必ず追いつめ、倒さなければならない最大の敵だった。あの男は多くの悲しみを生み、多くの悪意を伝染させる根源だ。たくさんの命を髑り、壊し、人を殺させるためだけに怪人を生みだす。怪人であるレイにとって、それはとても空虚で、ひどく悲しいことだった。

マスカレイダーズにはもう頼れない。自分自身の力で、何としてでもあの男を止めるしかない。それが“最高の怪人”の称号をもつ自分に与えられた使命なのであると、レイは認識し、覚悟をしていた。「お母ちゃん。どうしたのー？」

ベルゼバビーが首を傾げてレイの顔を覗きこんできた。レイは意識を思考の闇より現実に戻し、軽く微笑むと、彼女の丸い頬に付いたご飯粒を指先で掬ってやった。

「うっん。ちよつとね。ご飯食べた？」

「あとちよつとだよ、ぶんぶーん。お母ちゃんのほうが全然食べてないじゃんー。人の事いえないよー」

ベルゼバビーに指摘され、レイはハツとなつて自分のお椀に視線を向けた。確かにあまり減っていない。鮭も味噌汁もまだ8割型残されていた。少しテレビに集中し過ぎたらしい。本当だね、と返しながら、レイは茶碗を手に取る。ベルゼバビーも微笑み、味噌汁を一気に飲み干す。

その姿を微笑ましく眺め、ゆっくり食べて大丈夫だからね、と伝えながらレイはふとディッキーのことを思い出している。もしディッキーが生きていたならば、今と似たような会話を交わしていたのだろうか。あの子もかなり忙しい性格ではあったから、この幼女と同じようにご飯を必死で掻きこみ、それから美味しい美味しいと大袈裟なくらいに感激したに違いない。ディッキーはそんな子どもだった。本当に優しくて純粹で、いい子だった。

息子のことを思い出すとベルゼバビーに対する愛しさは一段と増した。一瞬まるでディッキーがレイの元に戻って来てくれたかのような、そんな錯覚にさえ陥る。

ベルゼバビーは口の周りを汁でべとべとにしたまま、お椀から顔をあげて、につこりと

微笑んだ。レイは寂しさと一粒の幸せを鮭の切り身とともにゆっくりと呑み込みながら、朝の光に目を細め、それから彼女の口元をティッシュで拭ってやった。

鎧の話 31

脇に挟んだ体温計が検査終了の音を鳴らす。取り出して確認すると、その長方形の薄暗い画面には、『37.2』と記されていた。

「……よし、下がったな」

坂井直也は自室のベッドで横になりながら体温計を眺め、安堵の息を漏らした。気だるい体をゆつくりと起こしてみる。数日間、ベッドに入りっぱなしだったためか少し動いただけでも体中が軋むようだった。まるでゲル状のプールに肩まで浸かっているような、重苦しい感じが気持ちをも鈍らせている。

頭には霧がかかったようで、胃も重たい。まだ体調は戻りきっていないが、それでも昨日よりは気分爽快に向かっているようだった。市販の風邪薬を飲んで、食事を胃に流し込み、一日中寝ているだけでも違うものだと、直也はまだ瞭然とは程遠い頭で感心する。微熱を孕んだため息を吐くと、何となく壁のカレンダーに目をやった。

一体今日は何月何日なのだろう、とカレンダーの数字を辿りながら考える。ここ数日は夢と現実の間を彷徨っていたために、全く見当がつかなかった。あの元鉦橋家で怪人の創造主に出会い、フェンリルと戦った時のことがはるか昔の出来事のように感じられる。確かあれは8月の10日付近の出来事だったはずだ、と記憶を探るが、それさえもどこか曖昧な形に歪んでいく。

完全に時間の感覚が消失していた。壁の時計に視線を移すと、長い針は3、短い針は9を指している。窓の外が明るいことから、今が午前9時15分過ぎということはすぐに判断がついた。窓は網戸が敷かれ、床では扇風機がしきりに首を振っていたが室内は蒸し暑かった。

直也は自分の汗ばんだ掌に目を落とし、ため息を零す。自分の実体を久方ぶりに取り戻した感覚が心を落ち着かせた。

時間感覚は狂っていても、40度を超える熱が何日も続いたことはよく覚えていた。直也はふわふわと漂う、おぼろげな意識の中で臨界を見た。田舎に残してきた両親や、ここしばらく会っていない学生時代の友達、咲や太田の姿、寂しげにこちらを見やるあきらや憂い顔を浮かべる拓也など、様々な人やそれに追隨する出来事が走馬灯のように、意識の中に流れた。

比喩ではなく、本当に死を覚悟した。実際、三途の川に片足を突っ込んでいたと思う。それでも何とかこうしてまた目覚めることができたのは、昔拓也から受け取った、けがが早く治癒されるという黒い布と、今、台所の方で何やら物音をたてている人物による献身的な看病があったからに他ならなかった。

直也は軽い耳鳴りの響く聴覚で、その音を遠く捉えている。やがてフローリングを足音が叩き、こちらに近づいてくる気配があった。そして直也の寝ている部屋のドアが開かれ、そこから少女の顔が覗きこんだ。

「あ、おっさんが生きてやがる！」

部屋に入って来た黒城ライは、開口一番、ベッド上で上半身を起こしている直也を見て、そう叫んだ。直也は慌てた風の彼女を見て苦笑する。

「なんだよ。生きてて悪いような言い方じゃねえか」

「うそうそ。そんなことはないって、心配しまくったんだから。熱は？ 下がったの？」

ツータールに束ねた髪を弾ませながら、ライは直也に駆け寄ってくる。本当に慌ただしいやつだ、と思いながら、直也は自分の表情が緩んでいくのを自覚していく。

「3 くらいになるまで、寝てなきゃダメだからな。私が絶対起きることを許さない！」

「俺は真冬の空気か」

なら俺は一生ベッドから起きることを許されねえよ。そう続けようとしたが、直也が言葉を発するよりも、ライの動きのほう素早かった。

ライは片膝をベッドの端に乗せると、前のめりになり、直也の手から体温計を掠め取った。呆気にとられる暇さえ与えない、それは見事な手捌きだった。

「あ、お前」

「お、37度。結構下がったじゃん。真夏並みの体温だ」

「まあ、今は真夏に違いないからな」

8月の中旬。言ってから、真夏でもないかと思ひ直す。秋の気配はまだ感じないが、夏が終わりを迎えようとしている哀愁のようなものは確かに空に漂っている気がする。

「そういえば、今日は何月何日だ？」

体温計をしげしげと眺めたあと、専用のケースにそれをしまうライに直也は問いかける。彼女は片膝をいまだベッドに乘せているため、彼女のいる方にクッションが傾いてしまっており、そのため直也の尻はわずかにずっこけてしまう。直也は両腕について、自分の体の位置を戻した。

ライは背後のカレンダーを振り返った。

「17日だよ。17日の火曜日。ジェイグロツサムがくる日だ」

「誰だ！ ジェイソンのことなら、奴は13日の金曜日だろうが！ 何も掠つてねえし。なんでお前の情報はことごとく精彩を欠くんだよ」

「ジェイグロツサムは英語の先生だよ。17日の火曜日になると、いちごジャムを頬張りながら他の先生の授業に乱入してくることで恐れられているんだ」

「知らねえよ！ 誰だ、そんなのを教師にしたやつは！ とつと追い出せ！」

まったく、と肩を落とし、それからライの口から伝えられた日付を、もう1度胸の内でも繰り返してみる。

8月17日。

気づけば8月も半ばを過ぎ、送り盆も終わってしまった。そして倒れてからおよそ1週間経ったのだな、と直也は感慨深く思う。それまでが実に密度の濃い日々だっただけに、殊更、寝込んでいただけで終わったこの1週間は空虚に感じた。

再会と離別。身を裂かれるような悲しみ。胸のつかえがとれるような快楽や。頭が中心が麻痺するほどの怒り。そして 憎悪。

そんな日々を激流と喩えるならば、先週は滝のような日々だった。

落下に身を委ねて、気付けば、すでに1週間が経過していた。そんな感覚に近かった。

「ま、元気になったならよかったよ。ずっと付き添っていた甲斐があった」

ライはベッドからようやく足を退けると、手を両腰に据え、満足げに笑った。

「病院に行きたくないっておっさんが言い出したときは、どうしようかと思ったけど、割となんとかなるもんだな。もしかしたらこれも私の才能かも。将来、スーパー看護師になろうかな」

「そんな胡散臭い看護師の世話になりたくねえ。というか俺がそんなこと言ったのか？ 本当に？ 病院に行きたくないって？」

「本当だよ。覚えてないの？ なんかごちゃごちゃ言ってたじゃないか。だから私が付きつきりで手厚いスーパー看病をしてあげてたんじゃん。まったく、勝手だよな。もう忘れたのかよ」

眉を曲げるライの言葉を、直也は目を丸くして聞いている。まったくそんなことをライに頼んだ記憶がなかった。おそらく怪人と戦った末に傷を負った、というあまりに荒唐無稽な事実を外部に漏らしてはいけないと本能が囁いたのだろう。今となっては全ては夢の中に紛れ込んでしまっている。医者への介入を拒否したことで、一歩間違えれば本当に死んでいたかもしれないと考えるとゾツとした。直也は自分の体が快調に向かってくれたことに、改めて心の底から安堵する。

「俺を看病してくれたことには、本当に感謝するよ。ありがとうな」
素直に礼を告げると、ライは一瞬瞠目したあとで、相手を崩した。「別にいいって。私が勝手にやったことだし。当たり前っていうか……まあ、そんなに改まらないでくれよ」

「いや、俺がいま生きているのはお前のおかげだよ。本当にありがとうなんて言葉じゃ伝えきれないくらい感謝してる。お前と会えて本当に良かった」

「止めるって！ あんまり褒められるのに慣れてないんだから、そ

んなこといわれたら照れるじゃん……」

その言葉通り、ライは頬を薄く染め、わずかに俯いている。しゅんと縮こまり、居心地悪そうにしきりに自分の指を絡ませるそんな彼女の仕草を、直也はひどく愛らしく感じた。

「ずいぶん世話をかけた。でもほら、俺はもうこの通り元気になったからさ。家に帰れよ。親父も心配してると思うぜ？」

直也はライの父親、黒城和弥と顔見知りだ。彼は直也の勤めている職場の所長だった。傲岸な振る舞いをする男で、いつも謎の自信に満ちあふれている。しかしその一方で漫画を読み漁るなど子どもっぽいところもあり、どこか憎めない人物だった。

父親の名前を出すと、ライは顔をあげ、それからばつが悪そうに目を伏せた。頬を掻き、それから上目遣いで直也を見やる。

「それが実はさ、私、家出てきたんだよね」

「家出？」

直也は怪訝を声にする。ライは浅く顎を引いた。

「うん。まあ、ちょっと喧嘩しちゃってさ。帰りづらなんだよ」

苦笑いを浮かべるライの顔を見つめながら、直也はその喧嘩の原因に目星をつける。おそらくそれはディッキーのことではないのかと予想した。彼女のペットのネズミが何者かによって殺され、まだその犯人が捕まっていない件のことだ。彼女の父と姉はその犯人について何かを知っている風らしいが、ライにはそれを隠しているらしい。それがライには許せないとのことで、直也に接触した理由も元を正せばその事が発端だった。

約束をした以上、犯人のことも調べてあげなくちゃな、と改めて考えていると、ライは顔をあげ、それから拝むように顔の前で掌を合わせた。

「だから頼むよ。もう少しだけ、おっさんのところにいさせてくれよ。お願い。この通り！ 1週間……いや、3日でいいからさ。な？」

懇願する彼女の様子に、直也は目を細める。女子中学生を、しか

も上司の娘を、1人暮らしの男の家に住まわせることはあまりよろしくないことは分かっていたが、彼女の看病を受けてしまった以上ライからの頼みを無碍にすることは憚られた。少し考えたあとで直也は結局、彼女の申し出に了解した。

「……しょうがねえなあ。3日だけだぞ。3日過ぎたらちゃんと家に帰れよ。それで親父と仲直りするんだぞ。いいか？」

「分かった分かった。じゃあ、そういうことで、しばらくよろしく！」

喜びを顔中に広げ、ライはもう1度力強く直也を拝んだ。その時、台所のほうでなにやら甲高い音が鳴り響いた。

「あ、できたかな！」

ライは台所の方に顔を向けると、慌ただしく部屋を駆けて出て行った。何とも忙しないいなと呆れつつ、直也は布団の中から這い出ると、やつとのものでベッドの脇に腰掛け、息をつく。1週間という時間は、どうやら直也から根こそぎ体力を奪ってしまったらしい。

直也は体を乗り出すと、普段使っている仕事机の上からメッセージジャーバッグを手に取った。ジッパーを開け、中から手帳を取り出すと、そこに挟んである1枚の写真を指で摘む。それは咲を写した写真だった。事件の聞きこみ調査のため、いつも持ち歩いているものだ。そのため写真の端は折れ曲がり、わずかにその色もくすんでしまっていたが、そこで微笑む咲の可憐な印象はまったく変わらな

い。
だつてこれ、私の母さんなんだよ。

「母さん、か……」

直也がこの写真を見せた時、ライは確かにそんなことを口にしてた。始めこそ聞き間違いだと思いこもつとし、意識から弾きだそうとしたこともあったが、鉦橋家での会話を経た今では、彼女の話が正しいことはもはや瞭然としていた。

直也はバッグの中からさらに、小さなビニールケースを取り出す。

その中には金色の毛髪が入っていた。鏡の内より装甲を展開したオウガの指に絡まっていたものだ。その正体について今では見当がついている。この毛髪に遺された、咲からのメッセージを直也は受け取ることができた。

ライは黒い鳥の力を介し、咲の手によって作られた怪人なのだろう。しかし、だからどうしたと直也は本心から思う。ライが人間であろうとなかろうと、彼女が咲の娘であるということのほうが直也にとっては重要だった。それにライは慌ただしく、年上に対する口のきき方も知らない不躰な少女であるものの悪い奴ではない。人を殺し、その死体を集める怪人たちとは異なる存在であることは明白だった。

写真と毛髪とを見比べるようにしていると、しばらくして、ライが湯気に包まれながら帰ってきた。手には鍋つかみを装着し、小さな鍋を両手で掴んでいる。直也はビニールケースだけをバッグの中に入らうと、眉をひそめた。

「……なんだ、それ？」

目眩のしそうな熱気と香ばしい匂いが一瞬で部屋中を席卷する。蒸気があたりに立ち込め、確実に室内の気温は上昇する。水分を大いに入れた湯気に巻かれているだけで、意識が遠くなるような気がした。

ライはベッドのすぐ脇に置かれた、折り畳み式の小さなテーブルに鍋を下ろした。鍋を覗きこむ直也の前で、ライはじゃじゃーんと口で盛大な効果音を付けながら、その蓋を開いた。中から白い湯気が我先にと噴き出してくる。ようやくそれが晴れていくと、その向こうに切り刻まれた野菜と卵の入った粥が現れた。

「じゃん！ おっさんの大好きなおかゆチャーハンだ！」

得意満面に言い放つライを前に、直也は数秒、啞然とした。

「いや、これは雑炊だろ」

指摘するが、ライはそれを受け入れない。唇をへの字に曲げ、頑なに首を振る。

「違う！ チャーハンおかゆだ！」

「さつきと順番が違うぞ。つかおい、早く蓋を逆さにしろよ！ 雫が床に垂れてるじゃねえか！」

「仕方ないだろ、これ熱いんだもん」

ライは蓋を持ち、雫を転々と床に零しながら、再びキッチンに戻った。ああもう、と頭を掻きながら、直也はベッドの下に置いてあったフェイスタオルを掴み、重たい体に抗うようにして、体を伸ばし、床の滴を素早く拭き取る。掃除を終え、やれやれと元の席に戻ったところで、ライが鼻歌交じりに帰ってきた。片手にレンゲ、もう一方の手にお椀が2つある。ぐったりとした風の直也を見てだろう。ライは首を傾げた。

「どうしたおっさん、何か疲れてる？」

「あー、疲れているとも。人の忠告を無視した奴がいたおかげでな」
「そうか。悪い奴もいたもんだな。病み上がりなんだから、ゆつくり休めよなー」

直也の向かいに座ると、ライはおたまを鍋の中に落とした。お椀とレンゲは自分と直也の前に1つずつ置く。それからおたまで鍋の中を軽く掻きまわし始めた。

「おっさんは、1日に1回はチャーハンを補給しないと死ぬって聞いたからさ。私、頑張って作ってみたんだよ。それもスーパ―看護師の勤めだからな」

「死なねえよ。なんだその人間。なんだその情報。そんな生物、真っ先に自然界から淘汰されるわ」

「おっさんの体の80パーセントはチャーハンでできてるらしいじやん。だから、外から取り入れないと、体を保つことができないんだ」

「できないんだ、じゃねえよ。どこにそのマニュアル本売ってるんだよ。ここに持ってこいよ。というか残りの20パーセントはなんだよ」

「エロ画像」

「それはもはや生物じゃねえ！　ただの卑猥なチャーハンだ！」
「まあ、なんでもいいからとりあえず食べようよ。私、お腹空いちやっただよ」

ライはあくまでもマイペースに、実にあっけらかんとした口調で話を打ち切ると、膝立ちになり、まず直也の腕に中のものをよそった。ご飯の色合いといい、匂いといい、どこからどう見ても、それは雑炊だった。ご飯の間が覗く汁の味は黒に近い。舌に乗せずとも味がひどく濃厚であることはそれだけで明らかだった。直也は礼を言つと、その温かい腕を受け取った。

「さあ、私のこのおかゆチャーハンをいっぱい食べて、とつとと熱下げようぜ。目指せマイナス300度！」

「絶対零度超えてる！　逆に死ぬわ！」

ライは自分のものにも雑炊をよそり終わると、箸を手に取り、顔の前で手を合わせて「いただきます」と呟いた。直也もため息をついてから箸を手に取り、「いただきます」と唱える。どんな指摘も反論の言葉も、彼女にとってはのれんに腕押しらしい。ならば彼女のペースに乗る以外に選択の余地があるわけもない。

だがそんな傍若無人な彼女の態度にも、不思議と嫌な気持ちはしなかった。それはやはり直也が大人になり、愛するものとの死や離別を経験し、その過程で置き去りにしてしまった何かをライが持つていたからであるし、さらに彼女からは時折、咲と同じ匂いを感じるからかもしれない。

そうした一瞬一瞬で、直也は実感する。やはりライから魂を分け与えられた存在なのだ。

直也は床に置いていた咲の写真を手に取った、「ちょっと確認したいことがあるんだけど」と前置きして、それを鍋の上でライに見せるようにする。

「なに？」

ライはレンゲで雑炊を掬いあげ、それにふうふうと息を吹きかけながら、こちらを見た。写真に視線をやると、レンゲをお碗の中に

戻し、目を丸くする。

「これ、母さんの……」

「やっぱりか。ずっと、お前の言ってたことが気になってたんだ」

直也は写真を半回転させ、ライの方に向けた。ライはお碗をテーブルに置くと、それを直也の手から受け取った。

「その人は、お前の母親で間違いないんだな？」

「うん、間違えるはずはないよ。母さんだ。私の母さん。私もおっさんが起きたら聞こうと思ってたんだよ」

ライは顔をあげた。湯気越しに見える彼女の瞳は、わずかに潤んでいるようだった。

「なあ、母さんは今、どこにいるんだよ。突然いなくなっちゃったんだ。一体、どうしちゃったんだよ。私、会いたいよ」

「……俺にも、分らない」

自分でも驚くほど、直也の口からは滑らかに嘘が出た。直也は知っている。彼女がもうこの世にいないことを。フェンリルを纏った謎の少年に3年前、殺されたということを。

1週間前、直也はその少年との邂逅を果たした。その正体が誰なのかは見当もつかないが、彼は自分が咲を手にかけたのだと告白していた。

あの少年の正体さえ分かれれば、事件はもはや解決したも同然である。だがその真実を嘘偽りなく話した時、ライがどんな表情を浮かべるかと考えると、それだけで背筋に震えが走るようだった。

ディッキーを殺した犯人を絶対に許さないと、憎悪を剥き出しにしていたライを思い出す。光を捨て、闇に染まったあの瞳が直也の胸を絞めつける。事実を話せば、ライはあのフェンリルの少年に怒りと憎しみの矛先を向けるに違いない。あんなライの姿を、直也は二度と見たくなかった。だから直也は、反射的に嘘をついた。母親が誰かに殺されたという真実など、ライはまだ知らなくてもいい。話すのは、事件の全てが解明されてからでも遅くはない。中途半端な今の状態で真実を口にしても、状況がややこしくなるだけのような

気がした。

「俺も咲さんを探してるんだ。だからこの写真をいつも持って、情報を集めてる。お前の家族に尋ねたのも、そういうことだ」

「……もしかしておっさんは、母さんの恋人、なの？」

ライは写真と直也とを見比べながら尋ねた。直也は自分の左手首をちらりと見た。

「元、だけどな」

直也は両腕を床につき、天井を見上げた。写真を見ずとも、咲の姿は3年経過した今でも、はつきりと思い浮かべることができる。その声も匂いも体温も、感覚で覚えている。咲に再び会うことは叶わない。だから直也にできることは、彼女の想いを継ぐことだけだ。「だからどうしても見つけたいんだ。お前と同じだ。俺も、咲さんに会いたい。だからこうして真相を追っている」

直也の視線の先にあるものを追うかのように、ライもまた天井を仰いだ。その姿勢のまま、「そっか」と彼女は短く応じる。その口元には笑みが浮かんでいた。

「じゃあ、なんか私に協力できることがあれば、どんどん言ってくれよ。お母さんの居場所、一緒に探そうよ。2人なら、1人よりもなんとかなるって」

ライの力強い言葉に直也は勇気づけられる。直也は複雑な心中のままに微笑みを返した。

「ああ、そうだな。少しずつ聞いていくかもしれないから、その時はよろしく頼む」

「……でもなんか、嬉しいよ。母さんを知ってる人に会えたなんて」「こっちこそ。まさか、お前が咲さんの娘だったなんて、驚きだ」

直也は本心を告げる。まさか上司の娘と咲に関係があつたなど、昔の自分なら想像すらしなかったに違いない。

突然、ライが「あっ」と声をあげた。彼女のほうを見ると、ライは膝立ちになり、顔の前で手を叩き合わせていた。「忘れてた」と目を見開く。

「そういえば、おっさんが寝ている間にお客さんが来たんだよ」

「客？」

「それがなんと、おまわりだよ、おまわり。そこに名刺置いといたんだけど。ない？」

ライが目で示した先を追うと、彼女の言うとおり、机の上に名刺が置かれていた。

直也は腰を浮かし、体を半分擦じって手を伸ばし、名刺を指で摘んだ。まだ重苦しい体を動かし、元の姿勢に戻しながら、名刺に書かれている名前を見て、ああ、と声を漏らす。

「知り合い？」

気付けば、ライが隣に来て名刺を横から覗きこんでいた。目を輝かせ、その様子はどこか浮ついている。いつの間に、という言葉ですんでのところで呑み込み、名刺の中心を指の腹で小突いた。

「ああ、柳川さんっていう、知り合いの刑事だよ。結構事件のことでお世話になってるんだ。で、いつ来たんだ？」

「昨日だよ昨日。おっさんはやばすぎてもう死んでるから、また来てくれって言ったんだ。そしたらまた電話してくれて。なるべく早めがいいとか言ってたけど」

「……そっか」

名刺には携帯の電話番号も記載されていた。さっそく電話をかけようとして室内に視線をさまよわせ、それから今は携帯電話を所持していないことを思い出した。公園でフェンリルに襲われ、その際に破壊されたままだった。機械自体はまた買い直せば良かったが、これまで蓄積してきたアドレス帳や画像ファイルなどのデータが全てお釈迦になってしまったのは痛手だった。落した程度ならば復旧も可能だろうが、直也の物は微塵に踏み砕かれているし、その破片も公園に放置したままとなっている。どれほど優秀な技術者の手を持ってしても、あそこからデータを引き出すのは不可能だろう。

「おい、ちよっとお前のケータイ貸してくれ。自分のが壊れたままだったの思いだした」

「もしかして母さんのことかな？　なんだよ、グッドタイミングじゃない！」

「……ああ、そうかもな。とりあえず、連絡してみれば分かることだろ」

おそらくそうだろう、と直也は予測する。柳川からの要件など、3年前の事件に関すること以外に思い至らない。

掌を上にして差しだすと、ライはワンピースのポケットから嬉々とした様子で携帯電話を取り出した。色は水色で、表面にはシールが貼ってある。複数下がったストラップの先には小さなぬいぐるみが繋がっていた。思ったよりも女の子らしい姿をもったその携帯電話を、直也は意外な思いで受け取る。眉間に皺を寄せるライの顔と携帯電話とを見比べた後で礼を言い、名刺に記された番号を手早く打ち込んだ。

「はい、もしもし？」

それほど待たされることもなく、柳川は電話に出た。かかってきた電話番号に見当がつかないからだろう。その声には警戒心が滲んでいる。

「俺です。坂井直也です。しばらく連絡できなくてすみませんでした」

名乗ると、一転して柳川は安堵の籠った声をあげた。

「ああ、君か。番号が違うから、分からなかった」

「実は電話が壊れちゃって。今は、知り合いのものを使ってるんですよ」

「ああ、連絡が急になくなったのはそういうわけか」

柳川は得心のいった風に息を零した。そういえば、柳川と会話をかわすのも、携帯電話を破壊されて以来であったことを思い出した。それから一切連絡をとっていなかったことに、直也は今更ながら申し訳なさを感じる。

「それで、体調は良くなったのかい？　あの女の子が、死にそうだとか言っていたが」

「まあ、電話できる程度には。それで、どうしたんです？　急な用事って聞きましたけど」

挨拶もほどほどに直也は本題を切り出す。何やら電話の向こうが騒がしい。直也との通話から離れ、柳川が誰かに指示を出す声も聞こえてくる。おそらく仕事中のだろう。慌しい様子が、電話越しでも伝わってくる。

柳川は受話口に戻ってくると、「封筒の中身は見たかい？」と言った。意味が分からず、直也は眉間に皺を寄せ、「封筒？」と尋ね返す。

「名刺と一緒に、女の子に渡しておいたんだけど。受け取ってない？」

直也は携帯電話を耳に当てたまま、ライを振り返った。ライはきょとんとした顔で直也の視線を受け止めると、慌しく腰を上げ、傍らにある円柱形のゴミ箱を漁りだした。信じられない思いで直也が見つめるその先で、ライはゴミ箱から顔をあげると、どこか誇らしげにも見える表情で片手にくしゃくしゃの茶封筒を掲げる。それは明らかについ数秒前までゴミ箱の奥底に眠っていたものに違いなく、直也はがつくりとうなだれた。

「あー……すみません、ありました。まだ中身は見えてないですけど」
直也の報告に対する返答はなかった。柳川はまたしても携帯電話から離れ、誰かと真剣な声音で話している。会話内容さえ聞き取れないものの、単なる世間話という風でもなさそうだった。

「あの、取り込み中なら、また電話しなおしましょうか？」

直也との会話を再開するなり、まず謝罪の言葉を口にする柳川に向けてそう提案すると、彼は申し訳なさそうに声を低くした。

「催促したのはこっちの方なのに。すまない。ちょっとこここのころ立て込んでね。まともに家にも帰れてない有様だよ」

「また事件ですか？」

「ま、そんなところだね。どうだい？　体が許すなら一緒に昼でも1時過ぎなら少しだけ時間が空くと思うんだけど」

直也は窓の外に目をやり、少し考えたあとで軽く顎を引いた。

「いいですよ、分かりました。場所はどうします？」

「前と同じ喫茶店でいいかな。もし体調が悪くて来られなくなったら、また連絡してくれ。じゃあすまないけど、電話を切るよ。1時半に待ち合わせてことで」

「はい。楽しみにしています」

直也がボタンを押すよりも一歩早く、受話口の向こうからぷつりと通話の切れる音が聞こえた。直也は携帯電話を閉じると、疲労の籠った息を吐き出した。体はまだまだ快調には程遠く、外に出るのは億劫ではあったが、以前通話の途中で携帯を破壊されたということもあり、なるべく直接顔を合わせて会話をしたい気持ちが強く働いていた。それが重要なものなら尚更だ。

結局、柳川が一体何の用事でこの家に来たのかは分からずじまいだった。おそらくその答えは彼がライに渡したという封筒の中にあるに違いない。直也はライに携帯電話を返しながら、ライの手にある封筒に視線を移した。一度、掌で握って丸めたものを広げ、手で皺を伸ばした様子が、そのみずばらしい姿からは窺い知れた。

「ごめん、おっさん。これ、ゴミと紛れ込んだみたいなんだ。頑張って伸ばしてここまででは戻ったんだけど」

「お前なあ……ま、今日のところは看病してくれたことに免じて許してやるよ」

「それで、どうなんだよ。やっぱりさっきのは、母さんのことだったの？」

「それが向こうも忙しいみたいで、それをまともに聞けなかった。午後になったら昼飯がてらでかけることになったよ」

差し出された封筒を受け取ると、直也はその封の口を開いた。中には折りたたまれた1枚の紙が挿入されている。カラーの片面印刷で素材もしっかりとしており、何かのリーフレットのようなだった。

「今日は休めよー。まだ体ふらふらなんだろ？ またすぐに熱上がつちゃうよ？」

「急用って言うてたんだろ？ ま、別に激しい運動するわけでもないし。バイクでちょっと行って帰ってくるだけだよ」

「なら私も連れてけよ」

直也は封の中に指を2本突き入れたまま、ライを振り返り、それから顔をしかめた。

「ダメに決まってるんだろ。咲さんに関わることかもしれないとはいえ、これは仕事なんだ。お前は留守番してろよ」

「嫌だよ。そんなの。連れていってくれよ」

断固として追いつがるライの態度に、直也は反論の余地さえ失う。彼女は身を乗り出し、直也を下から覗きこむようにした。

「おっさん病み上がりだろ？ 途中で具合が悪く鳴いたらどうすんだよ。私はおっさんのスーパー看護師だからな。私を留守番にするなら、そっちも留守番だ。この家から一步も外に出させるもんか」

そうして意固地に振る舞うライの真剣な表情を見つめ返しながら、仕事だから連れて行かない、というのは苦しい言い訳だなと直也は自虐的に思う。休職中の身にある直也が個人的に警察とやり取りをすることのどこに仕事の要素があるのかと自分を詰りたくもなる。

彼女を同伴させたくない理由は、“咲は行方不明になっている”いう嘘のメッキが剥がされることを恐れているからに他ならなかった。直也は胸に鈍い痛みを覚える。それは自分を救ってくれた恩人であるライに平然と嘘を吐いているという罪悪感からだった。だが今は、真実を塗り潰すより方法がない。

しかし、ライは直也以上の頑固者だ。一度こうと決められたら、説得することは難を極める。まだ彼女と付き合いの浅い直也でも、そんな彼女の性格は承知していた。

直也はライの力強い瞳を見つめ返し、それから深くため息をついた。頭を掻き、目を細める。こうなっては仕方がなかった。あまり口やかましく言っても、それはそれで直也に対する疑惑を深めさせるだけだと判断する。

「分かったよ。仕方ねえな……その代り、同席はするなよ。どっか

別の店とかで待っていること。いいか？」

「分かってるって。プライバシーってやつでしょ？ 大丈夫大丈夫。私はプライバシーを守るプロだから、大人しく待ってるよ」

任せるとばかりに自分の胸を叩くライを傍目に、直也は封筒の中からようやく紙を引き抜いた。リーフレットはひどく折れ曲がり、そのせいで封筒の出口に引っ掛かってしまつて、そのせいで中から引き出しづらくなつていたのだった。ライは直也に近づくと、横からその手元を覗きこんだ。

「そうそう。その中身、変な広告みたいなのが1枚はいつてただけだつたんだよ」

「だからって捨てるなよ。ってか、人の手紙勝手に見るんじゃないよ。社会、っていうか人間としてのマナーだぜ？」

「手紙を勝手に見たのは謝るけど、捨てたのはわざとじゃないよ。本当に他のものと混ぜっちゃつたんだって」

ライのあまりに隙の多い弁解を切つて返そうとして、しかし直也は絶句した。リーフレットを広げた瞬間、それは頭で理解するよりも先に、目を通じて意識下に直接飛び込んできた。

直也は目を見開き、息を呑み、頬を強張らせる。頭から血の気が引き、胸の奥から熱いものが込み上げてくるようだった。リーフレットを持つ手が震えた。

リーフレットの中央を陣取るように描かれていたのは、翼を広げた鳥だった。世の何もかもを憎むかのような鋭い眼光。禍々しく伸びた2本の足。星のない夜空に似た漆黒の体。

それは見間違えるはずもない。咲の首筋に刻まれていたあの痣、元鉦橋家で変貌を目の当たりにしたライの影の形と同様のものだった。

“黒い鳥” それは怪人の存在を匂わせるシンボルマークだ。その鳥のマークの上にはゴシック体で英文字、そして『8/21』という日付らしき数字が記されている。

さらに英文字と日付の間にはか細い文字で『我々が、あなたに光を

与えます』という一文が記されていた。

それ以外にリーフレットの表面は白地で、紙面の構成自体は非常にあっさりとしている。それだけにこの広告に秘められた強い意志のようなものが、伝わってくるような気がした。

「L・I・LY・B・O・N・E」

記されたアルファベットの羅列を一字ずつ読み上げる。それから直也は唾を呑み込み、眉根を強く寄せた。

「リリイ、ボーン」

それは全く聞き馴染みのない単語だった。しかし黒い鳥の側に淡々と掲げられたその文字は疑惑以上に、直也の心に喻えようのない不気味な感触を抱かせた。

2話「この世界の生贄」

魔物の話 41

父親の入院している病室で2時間を過ごしたレイは、病院の前に立つと、日課であるパトロールに行動を移した。

パトロールといえば聞こえはいいが、その実は単なるそぞろ歩きである。うろつろと歩き、目の先の道が分かたれていれば、昨日とは別の道に足を踏み出す。そういった選択を繋げながら、陽炎の立ち昇る道を進むだけである。

この活動はベルゼバビーにも協力を仰いでいる。ただしレイに同行という形ではなく、彼女を解き放ち、好き勝手に動いてもらい、何か気になるものがあればレイに連絡をしてくれるように頼む、というような体制をとっていた。ベルゼバビーは怪人の姿になれば飛ぶことも可能であり、その小柄さも相まって人に見つかりにくい。その特性は、こういった索敵行動には最適だった。

彼女を単独行動させることに不安はあったし、寂しくもあったが、可愛い子には旅をさせるの精神でレイはベルゼバビーに昼の弁当を持たせると、無事と収穫を祈り、一時の別れを告げたのだった。

パトロールの目的は式原の所在に関する情報収集と、怪人の索敵それからライの搜索だった。父親は彼女の居場所を知っている風な態度で放っておけと言うものの、レイはやはり妹のことが心配ではあった。しかし父親にあいつを信じると言われ、さらにレイ自身もいまだに彼女と和解する手段が見つけられない以上、それほど表立って探すことはできず、ベルゼバビーにこっそりと、事のついでのような形で頼むに至っている。

心配するな、あいつなら大丈夫だろう、と言う父親の言葉を今は支えにするしかなかった。荒唐無稽なことを言いはするが、これまで裏切られたことのない父の判断を信じるしかない。

幸い、昨日送ったメールは返ってきている。怒りを表す絵文字付き

の、短い文章だった。まだレイに対する怒りは冷めやらぬらしいが、とりあえず今のところ無事である現状に安堵する。

スカートのポケットから携帯電話を取り出し、電話・メールともに着信がないことを確認しながら、レイは国道沿いを歩いていく。毛虫に対してはいまだ本能的な恐怖が先立つものの、トラックへの恐怖心は当初に比べ、大分薄まっていた。これまでは意図的に避けていた交通量の多い表通りも、今では何の躊躇もなく通ることができる。

時折、人のいない場所を選んで立ち止まり、ふと瞼を閉じてみる。五感を鋭敏にし、体全体を目に変えるような気分で、深呼吸と共に己の心をも風の中に解放する。

そうしながら、湿気を帯びた空気の裏側に虎視眈眈と詰める、有象無象の気配を探ってみる。喧噪の中に紛れ込んだ悪意を検分する。排気ガス混じりの濁った臭いに乗じる不穏を嗅ぎ取るうと試みる。

しかし、その気配は一向にレイの感覚に引つ掛かることはなかった。この1週間、ずっとそうだ。あの頭の奥の方から押し迫ってくるような、強烈な光と、鋭い痛みがすでに懐かしく感じるほどだった。

少なくとも東京周辺ではここ最近、怪人の姿は全く見られていない。式原も行方知らずのままだった。

怪人だけではなく華永あきら率いる黄金の鳥の集団や、マスカレイダーズもまたここしばらく姿を見せないでいる。『ホテル クラークン』前で起きたあの戦いで双方ともに力を消耗してしまったため、今は身を隠し、傷を癒しているのかもしれない。

感覚を研ぎ澄ましながら炎天下を歩いていると、すぐに昼時になった。レイは通りがかりのパン屋で簡単な食事を済ませると、携帯電話で時間を確かめた後で、今度は着実な足取りで道をたどった。

絶えずこめかみのあたりから滑り落ちてくる汗を、ハンドタオルで拭いながらしばらく歩くと、白い外装をもった洋風の一軒家の前にたどり着いた。固く閉め切られた門の脇にインターホンが備えられている。レイはそれを鳴らした。少しの時間、炎天下に放置され、

しばらくしてから焦りを帯びた少女の声が返ってきた。

レイが自分の名前を伝えると今度はそれほど待たされることもなく、目の前で自動的に門がスライドしていった。門が完全に開ききったところで、レイはその家の敷地内に足を踏み入れる。人工芝を踏みしめ、道に点々と配置されたレンガ色のタイルをたどり、家の前にたどり着く。ちょうどそのタイミングで玄関のドアが内側から開かれた。

「ごめんねレイちゃん、時間がかっちゃった」

家の中から慌てふためいた様子でレイの親友、天村悠が姿を現した。彼女は花柄のワンピースを着ていた。量の多かった髪の毛は少し短くなっている。以前は髪の毛の茂りの中に、両側で結った髪の毛の縛り目が見えていたのだが、今は緑色のゴムがはつきりと見える。縛り目の位置は髪量を減らす前とは違い、耳の下で小さく纏めてあった。

「いいよ、気にしないで。悠、髪切ったんだ。凄く似あってる。可愛いよ」

「えへへ……ありがとう。暑かったから昨日切ってきた。中は涼しくなってるよ。あがってあがって」

悠は表情をパツと明るくし、くるりと踵を返した。悠の嬉しそうな顔色を見ると、自分の心も自然と明るくなるから不思議だった。だからレイは親友の笑顔が何よりも大好きだ。レイも笑みを浮かべ、それから「お邪魔します」と今更ながらに頭を下げた。

玄関に足を踏み入れ、靴を脱ぎ、悠の後を追う。家の中は彼女の言う通り、冷房で冷やされていた。肌の上を心地よい空気が滑る。体から熱気が失せ、細胞の1つ1つまで冷やされていくかのような感触を覚えた。

廊下を小走りで駆ける悠の痩せた背中を、レイは首筋の汗を指で拭いながら感慨深い思いで見つめる。こんなにも早く、親友と病室以外の場所で顔を合わせることができるとは想像だになかった。

悠が入院したのは今年の初めのことだ。それまでも調子を崩して

は入退院を繰り返していたのだが、今回はその中でも長かった。3年生になってから1日だけ許可が降り、学校に登校したことがあるのだが、その翌日には高い熱を出してしまい、それ以来外にすら出られない生活が続いていた。どうやらひどく難しい病氣らしく、いつ死んでもおかしくないという状況だったらしい。病氣によつてベッドに縛られ、学校生活はおろか、15歳の少女らしい生活を送ることのできない親友を見るたび、レイは哀しい気持ちになったものだった。そして親友の強さに励まされたこともあった。

だが、1週間前に悠は退院し、自宅に帰ってきた。

こうして向かい合い、顔色を見る限りでは、その後の経過も順調らしい。幼い頃に発症し、完治は非常に難しいと宣告されていた病氣だけに、医者も驚いていた。しかもなぜ急激に良くなったのか原因が全く分からないらしい。画期的な治療法を実践したわけでもなく、特別な措置を施したわけでもない。しかし現に、なぜか、悠は治つてしまった。完治とまではいかないが、入院を強いられなくなるまでに体調が良くなったのは、紛れもない事実だった。

悠は元氣になったのだ。また一緒に学校にも行くこともできるし、色々な場所で遊ぶことだってできる。これは、今までずっと頑張ってきた悠に神様が与えてくれた奇跡なのではないか。レイは浮かれた気分に乗つ取られるがままに、そんなあまりに荒唐無稽な結論を見出していた。それほどまでに今、悠と彼女の自宅で会えるこの状況が、嘘でも夢でもないことが、たまらなく嬉しかった。

まるで西洋の美術館を思わせる絢爛な廊下を通り、広々としたリビングに通される。そこはレイの住んでいる安アパートとは、まるで世界が違っていた。天井が高く、見回すだけでも一般的な家庭にはまずないであろう物がちらちらと見える。部屋の隅に置かれた、ガラスケースの中に入れられた鹿のはく製がその最たるものだろう。

天井から吊り下がった豪華なシャンデリアを見上げていると、悠が手近の椅子を勧めてきた。それもまた清廉な輝きを放っている。椅子自体の材質やクッションの素材からみて、おそらくこれも高級

品に違いない。レイは室内を改めて見渡しながら、思わずため息を零した。

「相変わらず悠の家は凄いな。こんな家に住めるなんて、うらやましい」

「私はレイちゃんの家みたいな方がうらやましいなあ。なんか、みんなの家って感じがするもん。それに今は私とたあくんしかいないからこの家も広すぎるよ。お掃除だって大変だし……」

レイは勧められた席に腰を下ろした。悠もテーブルの向かいに座る。テーブルの上には籠の中にオレンジが積み上がっていた。レイはテーブルを指の先でこんこんと叩き、その音の響き具合を楽しんでから悠を見た。

「なにそのくらい。私の家なんか、歩くだけで床がぎしぎし鳴るからね。ぎしぎし。いつ底が抜けるのか、いつも恐る恐る歩いてるよ。死と隣り合わせの毎日だよ」

「レイちゃんは体細いし、体重も軽いから、大丈夫だよ」

「それに私も1人部屋が欲しいよ。ライは寝相悪いし。寝てても起きててもうるさいし」

「あ、そういえばライちゃんは元気？ 今度、久しぶりに会いたいなあ」

胸の前で手を組み合わせ、にこりと微笑む悠を前にレイは曖昧に笑った。悠にはライが家出をしたことは話していない。いらぬ心配をかけなくなかったからだ。病気の枷から外れ、悠はようやく新しい生活に踏み出そうとしている。そんな彼女の足を引っ張るようなことはしたくなかった。

「まあ、そのうちね」

レイは言葉を濁すと、籠の中のオレンジを1つ手に取った。親指の爪を立て、固い皮に突き立てる。1週間前、ホテルの階段で華永あきらに踏み割られた爪は、とうの昔に完治していた。それだけでなく、レイの体には戦いの傷跡は今や何も残されていない。それはレイが人間ではなく、人の形をした怪物であることを示す、もつと

も顕著な部分だった。

「私もね、今度、レイちゃんに会わせたい人がいるの」

悠はテーブルに両肘を付き、組み合わせた手の上に顎を置きながら言った。そののんびりとした様子は夏の暑さにうだる小犬を彷彿とさせる。こうして正面からその姿を眺めているだけで、心がなごんだ。

「ん。誰？」

「えへへ……あのね、お父さんと、お母さん」

レイはオレンジの皮を剥いていた手を止め、悠の顔をまじまじと見つめた。悠は手の上に頬を預け、首を傾げるようにしながら、照れくさそうに笑っている。そうすると今度は溶けかけたアイスのように見えた。

「悠のお父さんとお母さん、帰ってくるの？」

「うん。昨日、電話があつたの。今度の金曜日に帰ってくるんだって」

レイは悠の背後の壁にかかったカレンダーを、反射的に見た。何もかもが優雅に彩られたこの部屋の中で、そのカレンダーだけは銀行等で無料でもらえるような至極一般的なもので、レイはその見慣れた景色に少しだけ安心する。

今度の金曜日は8月の20日だった。割合と日にちは近い。レイは悠の父親である天村氏とならば会ったことはあつたが、彼女の母親と面識はなかった。悠や佑からも、父親以上にあまり日本にはいない人、以上の話はこれまで聞いたことがない。

「悠のお母さんって、どういう人なの？」

「えっとね、すごくかっこいいよ。デザイナーで世界中を飛び回ってるんだけど。あんまり他に女の人がいなくて、とにかく凄いんだって！」

「へえ」

「私も久しぶりに会っただけだね。最後に見たときは、背中にベース背負ってたの。こう、忍者みたいに」

「へえ、野球でもするの？」

「そつちじゃないよ！ 楽器の方だよ！」

「ああ、そつち」

考えてみれば、たとえ野球を嗜む人でもホームベースを持ち歩くことはしないだろう。レイはベースという楽器を間近で見たことはなかったが、それでも何となく頭の中で形を思い描くことはできた。縦に長い形をした4つの弦がある弦楽器だ。テレビの音楽番組が何かでその楽器を演奏している人の姿を目にしたことがあった。髪を真っ赤に染めた、ビジュアル系ロックバンドのメンバーだった。もしかしたら佑のギターも母親から影響を受けたのかもしれないな、とぼんやりと思う。

「それはかつこよさそうだね。でも、デザイナーなのになんで楽器？」

「たあくんと同じで、お母さんもバンド仲間がいるんだって。上手らしいんだけど、私は聞いたことないんだよね」

そう言って舌を出し、苦笑を浮かべる悠は、とても嬉しそうだった。本当に両親と会えることが楽しみで仕方がないのだろう。悠が喜んでいる姿を目にすると、こちらまで気持ちが弾んでくる。

「悠、本当にお母さんとお父さんのこと、好きなんだね」

レイもまた口元に笑みを携えながら言うと、悠は躊躇いもなく笑顔で頷いた。

「うん、大好き。あんまり帰ってきてくれないのはちょっと寂しいけど、仕事が大変なのも分かってるから。そうやって頑張ってるお母さんもお父さんも、すごく偉いと思う」

「悠は両親思いなんだね」

「私がこうやって今元気になったのも、お父さんたちがいい病院に入れてくれたおかげだから。だから、今度会った時にありがとう、ってそう言いたい」

「うん。元気になった悠を見たら、きつと喜んでくれると思うよ」
赤の他人である自分でさえ、悠が元気になったことがこれ程まで

に嬉しいのだから、両親であれば尚更に違いない。悠と彼女の両親が顔を合わせ、楽しげに会話を交わす姿を想像すると、それだけで心に温かい風が吹き込むようだった。

その時、部屋の奥にあるドアが音を立てて開いた。悠がそちらを振り返り、レイもドアの方に視線を移す。すると開かれたドアの先から、Ｔシャツにハーフパンツ姿の天村佑が姿を現した。彼の左腕には、手首から肘まで固く包帯が巻かれている。レイはその腕に視線を向けぬよう注意を払いながら、表情を綻ばせ、佑に向けて軽く手をあげた。

「お兄さん、お邪魔してます」

「誰か来たと思ったら、やっぱりレイちゃんだったんだ。ようこそ」
佑は小さく笑むと、レイの隣の椅子に腰を下ろした。彼の髪からふわりと整髪料の甘い香りが漂ってくる。レイはしばらく呆然と佑の顔を見つめたあとで口元を緩めた。

「体調、よさそうですね。安心しました」

「レイちゃんと悠のおかげだよ。２人とも病み上がりなのに世話かけちゃって。本当に感謝してるよ……ありがとう」

包帯のしてある左手の指で、佑は頬を掻く。レイは佑から視線を逸らし、そして正面の悠と笑みを交わした。

「レイちゃんが毎日来てくれるおかげで、色々助かってるよ。俺、ぶきつちよだからさ。あんまり家事うまくできないし」

「気にしないでください。勝手に入り込んでるだけですから。悠があまりに可愛すぎるから、気付くと毎日来ちゃいます」

「レ、レイちゃん！」

レイが真顔で言うところ、悠は顔を耳まで赤くして照れた。佑はレイと悠を交互に見つめ、それから顔をくしゃりとしかめるようにして笑う。

「そっかー、まあ、悠は世界一可愛いからそれも仕方ないな」

「たあくんまで！ 恥ずかしいよ……」

畳みかけるような絶賛の嵐に、悠はすっかり照れて顔を俯かせて

いる。レイは得意げに頷く佑の顔に目をやり、不敵に言い放った。
「まあ、私の方が悠のことを好きですけどね」

レイの放った言葉に、佑は一瞬虚を衝かれたような様子を見せ、その後ですぐさま反論した。

「いいや、俺の方が好きだな。こればかりはレイちゃんにも譲れない。俺が世界一、悠の事が大好きなんだ」

「あー。じゃあ、あれやりましょうよ。悠の体を2人で両方から引っ張って、先に千切った方が勝ちっていう」

「嫌だ！ 体千切れたら死んじゃう！」

「というか悠、こんなにゆっくりしていいのかよ。まさかレッスン、初回から遅刻する気か？」

「あっ！」

佑が指摘すると、悠は弾かれるように椅子から立ち上がり、勢い余って椅子ごと床に転げ落ちた。広いリビングに椅子の倒れる、けたたましい音が反響する。

レイは慌てて、同じく血相を変えた佑と一緒に悠を抱き起こした。悠は恥ずかしそうに笑いながら、ごめんね、と尻をさすっている。

「大丈夫、悠？」

「悠、痛くないか！ 俺が悪かったよ、焦らせちゃって。大丈夫、安心しろ！ 今から準備すれば余裕で間に合うよ。間に合わなくてもその時は、俺がチャリで時速60キロで送ってやるから！」

「お兄さん、それは逆に危険です」

冗談ならばまだしも、そのセリフを真顔で、本気で言っている風なのが佑の厄介なところだ。心配をするレイと佑の視線を受けながら、悠は笑顔をみせた。

「うん、全然大丈夫、痛くない痛くない！ レイちゃんせつかく来てくれたのにごめんね。今日からレッスンだから、準備してくる」

まだお尻に手を触れながら、悠はぴよこぴよことリビングを歩いて横切り、廊下に出ていった。

レイは佑と顔を見合わせ、苦笑いを浮かべてから先ほどと同じ椅

子に腰を下ろした。

「そっか。今日からバイオリンでしたっけ。すっかり明日だと勘違いしてました」

「ああ。うん、そう。さっきまで、あいつでかける準備してたんだけど。レイちゃんに来て、頭から吹っ飛んじやったのかも。うっかりものだしな。今みたいなことなんてしょっちゅうだから、目を離せないよ」

「でもそういうところが可愛いんですけどね」

「まあね」

佑はレイの正面に座った。先ほどまで悠のいた場所だった。それから籠の中のオレンジを手に取り、皮を剥き始める。レイもまた皮向きが途中であったことを思い出し、テーブルの上に転がったオレンジを掴み上げた。

「でもまさか悠がバイオリンを始めたいだなんて言い出すなんて、びっくりですよ」

包帯の巻かれた左手を添え、右手で器用に皮を剥く佑の手元を見つめながらレイは尋ねる。まるで紙を千切るように、彼の手に皮がさらわれ、オレンジの身が少しずつ顕わになっていく。佑は顔をあげると、同感という風に軽く顎を引いた。

「本当だよ。あいつそんなこと、今まで一度も言い出したことなかったのに。いつから考えてたんだろうな」

悠がバイオリンをやりたいと突然言い出した時、レイは己の耳を疑った。これまでレイは、そして佑でさえも、悠が楽器に興味を持っているという話を聞いた覚えがなかった。

さらに入院中にレイや佑に相談もなく、レッスン・スクールに話を取りつけていたということも、さらに驚愕を後押しさせた。聞く話によると、そのスクールにはお試し期間というものが存在するらしく、2週間は無料でレッスンを受けられるらしい。楽器や本も貸してもらえることや、家からそれほど離れていない立地条件にも引かれ、悠はとりあえずそこに通ってみることに決めたらしかった。

正直レイは、悠がそれほどまでに積極的な性格だとは思わなかった。どこか甘えん坊で、臆病とも慎重ともいえるその性質こそが、悠の本分だと思い込んでいた。

しかしその一方で、悠の気持ちも理解できる。これまで悠は病気のせいで好きなことを自由にやらせてもらえなかった。しかし病気が波を引くように快調に向かったことであらゆる制約からようやく解き放たれ、悠はこれから新たに始まる人生を精一杯に謳歌しようとしているのだろう。その気持ちはこれから生きる上で大切なことであるし、尊重してあげるべきことだろう。そして親友として応援してあげたいと素直に思った。そしてそれは、佑も同様に違いない。

「ま、俺は悠が楽しく毎日を過ごしてくれればそれでいいよ。ちょっと寂しいけど。あいつも、前に進むんだよな。俺の知らない友達作って、知らない生活送って、そうやって成長していくんだよな」

裸のオレンジを手の中で転がしながらそう言葉を浮かべる佑は、寂寥感と喜びを同席させた。実に複雑な表情をしていた。レイもまた同じ気持ちを抱えている。悠が新しい生活を歩むことを歓迎する反面、彼女が手の届かない場所に行ってしまうかのようで、少しだけ寂しかった。だが、この痛みを受け入れなくてはならないのだと思う。人は、前に進むべきなのだ。

「はい……そうですね」

レイは頷いた。佑が微笑む。前に進むとする悠の邪魔をする権利は誰にもない。自分たちができることは、悠を守り、その未来を切り開くことだ。レイは佑と視線を交わし、自分たちの役目を言葉に出さぬままに認め合った。

「そういえば両親が金曜日に帰ってくるそうじゃないですか。悠が嬉しそうに話してましたよ」

悠との会話を思い出しながらレイが何気なく言うと、佑は表情を途端に曇らせた。そんな彼の顔を見て、レイはハツとなる。佑と天村氏との折り合いがひどく悪いことを不意に思い出し、口を噤むが、

もはや後の祭りだった。

佑はオレンジを片手に席を立った。ぶらぶらとリビングの中央あたりまで移動し、それからレイを背後に、大きな窓の外を見つめる。「悠はあいつらと会えること、喜んでるから、俺あまり言えないんだけどさ」

レイの場所からでは彼の表情を窺うことはできない。だがその語調には確かな怒りが滲んでいた。

「今更なんなんだよ、とは思うよ。母さんなんかしばらく連絡もよこさなかったくせに。親父も悠が危ないってときに来てくれなかったくせに。今更になって、来るんだなんて。遅えよって感じだよ」

病気の妹を残して仕事に明け暮れる両親を、佑は許せないのだから。彼が悠を溺愛するのも、妹を守るのは自分しかいないと考えているからに違いない。彼は両親を信頼していない。天村氏を悪い人だとは到底思えなかっただけに、レイは佑とその両親のすれ違いに悲しさを覚えるが、こればかりはどうにもならなかった。家族の問題は家族の中で決着を付けるべきだ。少なくとも部外者が軽々しく口を出していい問題とは思えなかった。

「俺はあいつらを許さない。今頃母親、父親面するなってんだ。悠は俺が守る。俺が……」

空を睨みながら、佑はうわごとのように呟く。だがレイの存在を思い出したのか、びくりと1度肩を震わせ、それから振り返り、弱い笑みを浮かべた。その彼の表情に、レイは少しだけ安心する。「……ごめん、レイちゃん。ちょっと自分の世界に入り込んでしまった」

「いえ。まあ、お兄さんの言うことも分からないでもないですから」「まあ、何にせよ。悠が喜んでくれるのはいいことだよ。……そうだ、レイちゃんも悠と一緒に送っていく？」

佑からの提案に、レイはオレンジを剥きながら目を丸くした。

「いいんですか？」

「大歓迎だよ。レイちゃんがいたほうが、心強いし。それに……」

言って、佑は僅かに目を細めた。レイは彼の表情にぐっと濃い影が射したのを目の当たりにして、思わず閉口する。目が爛々とぎらついた光を帯び、その声音に憎悪が混じる。

「……怪人だつて、出るかもしれないからな」

レイは息を詰ませた。

自分を見つめる佑の黒々と濁った瞳の奥には、悠の病室に忍び込み、悠の傍らに立つ怪人の姿が映し出されているに違いない。

その視線から逃れたくて、レイはつい、彼の左腕に視線を移した。まるで雁字搦めに結んだ鎖のように彼の腕を封じた包帯は、あまりにも痛々しくレイの目には映った

結局、佑はライブに参加しなかった。人間をはるかに超越した回復能力を備え、1日たらずで全快したレイとは異なり、装甲服を纏っても結局は人間にしか過ぎない佑は、この1週間ともに動くことすらままならなかった。

病院で治療を受け、家に戻ってからはレイと悠の2人で看病をし、2、3日前に何とか日常生活を送れるまでに回復はしたものの、左手の傷は深く、舞台に立ち、ギターを掻き鳴らすことは現実的に不可能だった。

レイは悠の笑顔と同じくらい、佑の笑顔が好きだった。彼の表情から底抜けに明るい色が消えて久しい。特に最近の佑は、腕のけがを負ったこともあるだろうが、目に見えて元気がない。装甲服を纏い、茨の道に足を踏み出して以降、佑に纏わりつく影は色濃さを増すばかりだった。

佑は“オウガ”と戦いに行った先々であつたことに対し、一向に口を閉ざし続けている。なぜ、どこで、どうやって彼は怪我を負ったのか。戦いの最中に何を聞き、何を見て、何が彼の身に降りかかったのか。その全てが謎に包まれていた。

彼が沈黙を守り続ける理由は、そこにわだかまりがあるからだ。佑の心が沈んでいるのは、ギターが弾けないということ以上に、口を噤んだその場所にこそ本当の原因があるのではないかとレイは睨ん

でいた。

窓の外に視線を戻す佑の後姿を見つめながら、レイは切ない思いに駆られる。佑が少しでも元気になるように、その影を少しでも払うために、自分は何ができるだろうか。いくら思い悩もうとも、いいアイデアはまったく浮かんではこない。

ため息を零し、ようやく皮を剥き終えたオレンジを口に運んだ。一口サイズに切り取ったそれを奥歯ですり潰す。果肉が口の中で弾け、酸っぱい味が舌の上に広がった。

鎧の話 32

ノートパソコンを起動し、寝ている間に起こったニュースを確認したが、7月の初めより世間を騒がせている連続女性猟奇殺人事件の捜査は、あれから進展していないようだった。

冷凍保存された11の死体を拓也と共に発見したあの洋館は、いまだ警察の手が入っている。S I N エージェンシーの事件の時でも実感したが、警察はこういった非現実的な要素の介在する事件にはどうも弱いような気がしている。

捜査の進展はなかったが、同時に怪人が新たな行動を起こした様子もなかった。マスカレイダーズやあきらたちが戦ったらしき跡もない。そのことに安堵する一方でなぜここにきてびたりと非現実の猛威が止んだのか、不穏なものも感じた。

1週間前、直也は怪人たちの創造主であり、殺人事件の犯人でもある男と遭遇したが、あの男は自分の欲望を簡単に曲げるような人物には見えなかった。今が台風の前の静けさなのだと考えると、それだけでゾッとする。あの男が一体何を企んでいるのか、直也には予想さえつかない。

だからこそ、柳川から送られてきた広告が直也の興味と期待を誘った。あの鳥のマークは間違いなく、怪人と通じているだろうと思

う。咲のこととは少し遠ざかるかもしれないが、S I N エージェンシーの事件と同じくらい、あの男が起こしている殺人事件にも直也は大きなウェイトを置いていたので、柳川の話に収穫はあるだろうと判断した。

柳川と待ち合わせをした喫茶店は当然のことながら、以前に訪れた時とまったく同じ佇まいで直也を迎えてくれた。茶色を基調としたシックな装いの外観で、こぢんまりとしているがなかなかおしゃれな店だった。チェーン店ではなく、知る人ぞ知るといふ類の個人経営店で、密談を交わすにはもってこいの場所だった。

直也は店のドアの脇にバイクを停めると、ヘルメットを取り去り、脇に抱えた。ライもまた座席から降りて、頭をヘルメットから抜く。その頬はわずかに紅潮しており、額に髪がびったりと張り付いていた。

「それにしても、あつちいなー。汗びつしよりだよ。髪ぼさぼさ！」
「もう8月も終わるんだから、もう少し涼しくなるといいんだけどな。ま、明日から雨だっていうし、少しは楽になるだろ」

「でもすげえよなあ。喫茶店でおまわりと待ち合わせだなんて。おっさんまるで探偵みたいだな」

「みたいじゃなくて、これでも一応本職だ」

「おいおい、おっさん。ニートは職業じゃないだろ」

「誰が無職だって言った！俺は探偵だって言ってるんだよ！」

声を荒らげ、それからふうと深く息を吐きだしながら、直也は手を庇がわりにして空を見上げた。抜けるような青空の中で、太陽が猛威を振るっている。もう少し手加減してくれと、額に浮いた汗を拭いながら悪態を吐く。病み上がりの体にこの暑さは響いた。

柳川が何の意図をもってあのリーフレットを直也に託したのかは検討がつかなかった。一体どこで手に入れたものなのだろうとメッセンジャーバッグの中に入れた封筒に意識を向けながら、不思議に思う。あの紙面に描かれていたのは間違いなく、怪人を生み出す権化、黒い鳥と呼ばれる物体の姿だった。

柳川は3年前の事件に関することで連絡をしてきたのだろうと半ば確信に近い思いで考えていたが、あのリーフレットを見た後では、その確信も揺らいでいる。もしかや柳川は一連の“怪人”絡みの事件について、情報を手に入れた可能性もあった。

病み上がりのせいかあまり頭が働かない。直也はため息をついた。どうせ柳川にあつて話せば疑問は氷解するのだ。強い陽射しを浴びながらこんなところで突っ立っていても、何の得もないことに気が付き、直也は顔をあげ、喫茶店に向けてよろよろと足を進めた。

「おい、おっさん早く来いよ！ 中は涼しいよ！」

茹で蛸になった気分でアスファルトに立ち昇る陽炎と一緒によるめいていると、ライが喫茶店のドアを少し開けて直也に呼びかけているのが見えた。直也はぼんやりと返事をし、ふらふらと喫茶店に近づいて行つたが、店の前まで来たところで違和感を覚えた。ハツとし、腕を伸ばしてライの手首を力強く掴む。

「いや、待て。なに普通にくつろぐうとしてんだ。お前は外にいろよ。そういう約束だろうが。プライバシーのプロはどこにいった」「だってあっちいじゃん。暑さの前ではプロも休業だよ。大丈夫。少しエアコン浴びたら出ていくからさ。ちょっとだけ、な？」

ライは肩をすくめ、親指と人差し指でコの字を作り、「ちよつと」を表現する。暑さと体調不良のせいで声を荒らげる気力も沸かず、直也は落胆した。

「分かったよ。だけど話が始まつたら出て行けよ。すぐ近くに本屋があるから、涼むならそこでやつてろ」

「さっすが、母さんの元彼氏！ 話が分かるなあ。じゃあさっさと中入ろうぜ！」

用件のある直也よりも先に、ライはドアの間に体を滑り込ませ、店内に入っていく。納得のいかないものを覚えながら、直也も後を続いた。

前回来た時と同様に、店内は薄暗く、そして閑散としていた。ライの言う通り、クーラーで程良く冷やされた店内は居心地がいい。

扇風機のモーター音が低く鳴っている。聴覚が捉えるのは店内に流れる軽やかなジャズだ。店の壁は戸棚と一体化しており、そこに外国の酒瓶が整然と並べられていた。

直也は入口の近くで立ち止まり、ざっと狭い店内を見渡す。しかしそこに柳川の姿はなかった。直也は左腕に目を落とし、それからそこに腕時計をはめていなかったことに気付く。あきらとお揃いで買い、ついこの間まで左手首に巻いていたそれは、今や自宅の机の奥深くに沈んでいた。

「おい、ライ。今何時だよ」

「え？ うーんと、1時35分だけど」

「約束の時間は過ぎてる、よな……」

怪訝に思い、直也は改めて店内に視線を巡らす。白々しく店内を過る音楽。温度を失ったコーヒーの香り。淡々と冷えた空気。直也たちの入店を知らせるベルの音が、虚しく空気の上を滑っていく。カウンターの方を見やる。しかしそこにあの無愛想な店主の姿はなかった。柳川ばかりでなく、店内には誰1人として客がいない。店内は無人だった。

「おい、いらっしやいませーとかないのかよ。礼儀の知らない店だなー。おっさん怒ってくれよ」

「店もお前にだけは言われたくないだろうな」

ライは騒がしく店内を奥へ奥へと進んでいく。直也は入口付近に立ち、内装を素早く観察した。

元よりあまり繁盛しておらず、常連客だけで持っているような店だった。今はあまり客の来る時間帯ではなく、だから店主は奥に引っ込んでこっそりと私用を済ませているのかもしれない。そこにちょうど直也たちが来店した。そう考えるのが、おそらく妥当だろう。

だが、直也の探偵としての嗅覚はどこかこの状況に不穏なものを捉えていた。どこか平穏な考えに帰結させるのには違和感がある。店内を進み、そしてテーブルの上に目を向けたとき、直也はその違和感の正体を知った。

テーブルの上に置かれたコーヒークップから湯気が立ち昇っていた。それも1つではない。隣のテーブルに1つ。背後のテーブルに2つ。湯気の濃さや入っている飲み物の量や種類こそ異なるものの、そのどれもが明らかに飲みかけであり、そこには人の体温の残滓のようなものが残されているようだった。

何かがおかしい、と思った。

1つならトイレのために席を立ったのだろうかと考える事ができるが、その数が複数となると、異様な状況としか思えなかった。この店で何かが起きている。尋常ではない何かが。暗く、重く、深沈とした、何か。それはこの昼下がりの住宅街で、けしてあつてはならぬことのような気がした。

「おっさん！」

ライが上擦った声をあげた。直也を振り返るその表情は、先ほどの明朗としたものから一転して、恐怖に歪んでいるように見える。彼女の様子にただならぬものを感じ、直也は店の奥に立つライのものと駆け付けた。

「どうした！」

直也の発したその声は、宙に弾けて溶けた。手から力が抜け、指をすり抜けたヘルメットが音を立てて床に落ちる。

直也は瞠目し、そして、目の前の光景をまず疑った。そして徐々にその意識が、視線が、床に横たわる大柄な男の存在に引き寄せられていく。

それは改めて確認するまでもなく、直也が待ち合わせをしていた相手、柳川の変わり果てた姿だった。

「柳川さん！」

柳川は手足を投げだした状態で、仰向けに倒れていた。目は見開かれたまま、口もぽかんと空洞を形作っており、唇の端から涎が垂れている。直也は屈みこむと、名前を呼び掛けながらその頬を叩いた。だが、柳川から反応が返ってくることはなかった。そのただひたすらに空虚な目は、じっと天井を見つめていた。直也は手の中が

店に入る前とは別の種類の汗で湿っていくのを感じた。

直也は柳川の鼻と口を手で覆った。掌はじつとりとした汗に塗れている。そこに風の当たる感触がない事を確認すると、直也の背中に寒気が走った。

「息をしてない……」

小声で呟くと、縋るように柳川の手首を掴んだ。親指で脈の場所を探り当てようとするが、意に反して、その指先に鼓動が跳ね返ってくることはなかった。さらに柳川の胸元をはだけさせ、そこに耳を当ててみることもしたが、結果は変わらなかった。

頭から一斉に血が引いていく。頬がひやりと冷たくなる。直也は信じられない思いで、柳川の顔を見た。彼は死んでいた。先ほどと比べると、彼の頬から弾力が失せ、冷たく凝っていつているような気がする。

柳川の体を簡単に検めたが、胸に青い痣がある以外に目立った外傷は見受けられなかった。

直也は彼の傍らに屈みこんだまま、しばらく動けなかった。ただ、あらゆる疑問が際限なく、頭の中で渦巻いていた。

ふと、直也は柳川の履くスラックスのポケットに目をやった。そこがひどく乱れているのが気になった。まるで何かを慌ててポケットの中から引っ張り出したかのように、裏返っている。中の白い布が飛び出していた。

だが、一体何を取り出したのだろうと考え、そして柳川の強く握られた右の拳に目が行き着いた。まだ死後硬直が発生するまで時間が経っていないようだったのが幸いだった。直也は心の中で柳川に謝りながら、2本の指で彼の拳を無理やり押し開いた。

緩んだ拳のすき間から、くしゃくしゃに丸まった小さな紙が転がり出てきた。直也は眉根を寄せ、それを拾い上げる。

「お、おっさん……」

震え、今にも砕けてなくなってしまうそうなほどにか細い声が届いた。直也は慌ててその紙を自分のポケットに入れると、それから

振り返った。

直也の背後でライが立ち尽くし、その身を震わせていた。直也を見る目も弱弱しく、その瞳は救済を請うような切迫さに満ちている。

「お前……」

「おっさん、一体、どうなってるんだよ。その人、まさか」

その普段は勝気な少女がふとみせた、恐怖に塗れた顔を直也はしばし見つめてから立ち上がると、彼女の肩を正面から掴んだ。早くこの場からライを逃がさなければ、と本能が命じている。この店内には、よくないものが蔓延している。いつまでもこんなところにといたら、直也はライまで魂を引かれてしまう。そんな発想が頭を過った。

「ライ、落ち着け。とりあえずここから出る。それで、警察に電話するんだ。そのへんの人に助けを求めてもいい。いいか、分かったか？」

「この人、死んでるのか？ だって、おまわりじゃないの？ この町の、平和を、守ってくれてるんだろ？」

「落ち着け！ いいか、この場ではお前だけが頼りなんだ。早く行け！」

声を荒らげる直也の前で、ライの目が再び見開かれた。直也は振り返り、自分の背後に注がれたライの視線の先を追う。そして息を止めた。首をよじった姿勢のまま、硬直する。

直也の背中側には4人掛けのテーブルが据えてある。その陰から人間の足が伸びていた。それも2人分。1人はスカート、もう1人はジーンズを履いている。

直也は慌てて踵を返すと、身を乗り出してカウンターの内側を覗き込んだ。すると直也の予想通り、そこにはこの店のマスターが仰向けで倒れていた。確認をとるまでもなく、死んでいることが分かった。直也は朦朧としながら、カウンターから後ずさる。

まるで死体の巣窟だ、と直也は呆然と店内を眺め、思う。今、自分の身に起きている事態を頭の中で整理しようとすると、目眩がし

た。先ほどまで自分は確かに日常の中にいたはずなのに、いつから悪夢に足を踏み入れてしまったのか。いくら悩みを重ねようとも答えは出なかった。

直也はこの凄惨たる光景に戸惑い、動揺に支配されていたが、それでもライをここから逃さなくてはという気持ちだけは先ほどよりもさらに強く働いていた。闇は光によって剥がされるが、その逆もまたあり得る。光が闇によって塗りつぶされてしまうほうが、むしろ、容易であるような気がした。

自分を深い暗がりから救ってくれたこの光を失ってはなるものか。怯え、なかなか店から出る踏み切りのつかぬ様子のライの背中を、直也はドアに向けて強く押した。ライに乱暴だと罵られ、力尽くだと叱られようと、彼女を失うよりははるかにマシだった。早く行け、と叫ぶ直也を、ライはゆるゆると振り返る。次の瞬間、彼女は大声をあげた。

「おっさん！」

全身でぶつかられ、ライによって直也の体は横に押しやられる。風に傾ぐ細木のようによるめき、椅子に腰をぶつける直也の肩にちりつと熱が過ぎり、その部分のシャツが引き裂かれた。焦げを伴って宙に枯葉のように散る衣類の残骸を目にしながら、直也は咄嗟に背後を窺う。そこに半袖で黒のパーカーを着た小柄な少女が立っており、直也を見つめていた。

一体いつからそこにいたのか、直也には判断がつかなかった。つい数秒前までは人の気配など微塵も感じられなかった。その少女は何の前触れもなく、あまりに突然に、当たり前のように、直也たちの背後に出現していた。

少女の顔は深く被ったフードによって隠され、その顔立ちを窺い知ることができない。ただ、薄い唇と白皙の頬だけが外気に晒されている。少女が首から提げた茶色の紐には、白い百合の花が通しており、それが胸元で小さく揺れている。

直也は少女と対峙したその瞬間、この少女に対してデジャブのよう

なものを感じた。この人物に会ったことがないのは確かはずなのに、どこか記憶の奥底で見覚えがある。自分の中に過ぎるその影は、直也の記憶に精細を施してはくれない。

「まったく、運のない奴らですー」

少女はその覇気のない唇に笑みを宿した。それは対峙する者の精神を炙るような、悪意で形作られた笑みだった。その瞬間、直也はこの少女が人間でないことを察した。

直也が言葉を発し、または何らかの行動を起こす、その前に少女の姿は変容を始めた。少女の人間としての輪郭がうつすらと空気に溶けていき、代わりに、その内側からおどろおどろしいシルエツトが浮き出てくる。頭の前からつまさきまで、撫でまわすような速度で少女の体を食らい尽くしたその影は両足を床に着け、椅子の背もたれに寄りかかり、確かな実体をもってこの世界に顕現した。

胸部にペンギンの絵が装飾された怪人だ。顔には深紅の単眼が光り、黄金色をした金属がまるで包帯のように巻き付いている。

「怪人……」

直也は目の前の異形を強く睨む。

体の右半身は肉食の獣のような、左半身は牙を持ち、血を啜る魚類のようなイメージをそれぞれ顕著に表している。どちらも鋭角的なデザインが下地にあり、そのため、ひどく凶暴な印象を全体像としていた。直也はこのタイプの怪人と何度か遭遇したことがある。人の姿を持ち、死体となる前の生前の記憶を色濃く宿す、あらゆる意味で厄介な怪人だ。直也はこれまでナインとグリフィンという2体の怪人に会ったことがあった。

怪人は左手で手近のテーブルに触れた。異変はすぐに視認できる形で現れた。もうもうと白煙が沸き起こり、水滴が次第に浮き始めると、次第にテーブルは軋むような音をあげながら凍結されていった。凍る。あらゆる物質がその動きを止め、沈黙を強制されていく。

怪人の左手から広がった凍結の波はテーブルを侵し終わると、さらにテーブルの足から床に下り、徐々に板張りの床を浸食していった。

それは徐々に直也の元にも近づいてくる。目視できる速度で、まるでドミノ倒しのように目の前のあらゆる物が凍り付いていく様は、現実から明らかに浮いていて、どこか愉快でもあった。

氷点下を易々と下回る温度が、店内に漂う熱気を舐め尽くしていく。直也は歯を鳴らして凍えた。白い煙が怪人の体より生み出され、店の天井や電灯をも有無をいわず凍りつかせていった。

直也は足先に迫ってくる氷結の波を認め、後ろに下がった。だが視界の端に青白い光が灯るのに気づき、すぐさま顔をあげる。すると青白い閃光に包まれた怪人の右の掌が、直也を迎えていた。

空気が破裂した。怪人の手から閃光が放たれ、直也と怪人との間にある空間を稲妻が切り裂いた。直也は反射的に横に転がり、その攻撃を回避する。ライフル銃が発砲されたかのような爆音が宙を轟き、続いて爆発が床を破片とともに打ち抜いた。

つい数刻前まで自分のいた場所に巨大な焦げ穴が空き、そこから黒い煙が絶えず吐き出されている様を見やると、直也は自分の身を案じるよりも先にライの姿を探した。

ライは床に倒れ、呻いていた。

先ほどの衝撃で吹き飛ばされたのか、横たわったまま苦悶に顔を歪めている。その膝は擦りむけ、血が滴り落ちている。再び怪人の掌に青白い光が灯った。直也は頭に血が昇るのを感じ、気づけば姿勢を正すのもおざなりに、ライのもとに飛び込んでいた。

「ライ！」

直也の悲痛の叫びをかき消すように、無情な爆音が空気を劈いた。直也はライの体をかき抱き、しかし、そのまま爆風に吞まれて壁に背中を叩きつけられた。肺が押し潰され、直也は血を吐くような痛みを覚える。

あまりの衝撃に直也の手からライは離れ、彼女自身もまた椅子を巻き込んで床を跳ねた。朦朧とする意識の中で、それでも直也は必死にライの姿を目で追う。無意識のうちに腕を伸ばし、彼女のもとに這って行こうとしている。

ここで彼女の存在を取り零したら、もう二度とその体温が還って
ることはないだろうという気がした。3年という月日を越えてよう
やく、咲の魂を知る人に出会うことができたのだ。こんなところで
彼女を失うわけにはいかなかった。

だが、満身創痍の体は昂ぶる意識に反して言うことを聞いてはくれ
ず、空回るばかりで、そうしてもがいているうちに直也の体に異形
の影が重なった。

「まずは、お前のほうから始末してやるですー」

怪人は左手を直也に向けて突き出した。その掌から冷気が白い霞
となって噴出される。直也は重たい体を揺さぶるように、咄嗟に身
を起こすと、前方に飛び込むようにして冷気をかわした。凍える空
気は床や壁を一瞬で凍結させ、さらに執拗に直也の足に絡みついて
きた。履いているスニーカーの踵に霞が触れ、それは足首に、また
はつまさきに向けてさらに浸食しようとしてくる。

直也は遮二無二足を動かし、スニーカーを力任せに脱ぎ捨てた。
体まで凍結が及ぶことはなかったが、切り捨てられ、宙を舞うスニ
ーカーは床に着地をした時には、まるで冷凍庫に保存した野菜のよ
うに凍りついていた。

「このっ……！」

直也は立ち上がろうとするが、背中に強い衝撃を受け、そのまま
腹を強く床に押し付けられた。胃を圧迫され、酸っぱいものが喉元
まで昇ってくる。

首を振るまでもなく、怪人に背を踏みつけられたのだと分かった。
すかさずポケットの中のプレートに手を伸ばそうとするが間に合わ
ず、その手首ももう一方の足で踏みにじられる。骨をへし折られた
かのような激痛が走り、直也はたまらず絶叫した。

「凍え死ぬのと、焼け死ぬのと、どちらがいいですかー？」

その行為自体を愉しむかのように直也の背中につま先を埋め込み
ながら、怪人は両手をかざし、おどけた。右手は電撃を帯びて青白
く輝き、左手は噴きだした冷気で白く包まれていた。どちらにせよ、

まともに浴びれば命はない。しかし、体の自由が利かず、そして逃れるための手段を持たぬ直也は、仰向けの姿勢のまま顔を引き攣らせて、楽しそうに両手を近づけたり、遠ざけたりしている怪人を視界の端に捉えるほかない。

そのうち、怪人は攻撃を焦らすのにも飽きたらしく、直也の背中に殊更体重をかけると、一気に両腕で掴みかかりに迫った。

「両方お見舞いしてやるですー」

「止める！」

乱雑と転がった椅子や机を跳ね飛ばしてライは駆けると、そのまま床を踏み切り、怪人の体にドロップキックを喰らわした。

だが怪人といえども、外見上はただの人間の少女と変わらないライの蹴りが通じるはずもなく、ペンギンの怪人の足が直也の体から外れることさえなかった。怪人は首を振ると、ライをじつと見つめた。

「この野郎！ おっさんからどきやがれ！」

威勢よく怒鳴り散らし、ライはさらに怪人を殴りつける。くぐもった音が静寂の室内に反響するが、怪人は体に這う蟻でも払うかのような様子で、殴りつけられた箇所を掌で撫でるだけだった

さらに拳を振り上げるライを怪人は手の甲を用いて軽くはね飛ばすと、直也の体を踏みつけていた足をどけ、体を完全にライの方に向けた。

その殺意の権化とも呼ぶべき荒々しい体躯をもつ怪人に見つめられ、ライは慄く。

直也は視界に飛び込んできたその光景にまず、目を見開いた。心臓が凍り、ざわめきが血流に乗って全身の肌をむらなく粟立たせる。

その直也を傷つけた右腕を胸の高さまで持ち上げ、その掌をライ目がけてゆらりと突き出そうとする。

「ライ！」

床に爪を立て、焦燥感に乗っ取られるがままに直也は上半身を起こす。自分にこの後起こるであろう事態を予測してか、ライは怯え

た目で怪人を見つめている。直也の体はこの窮地にも関わらず、思い通りに動いてはくれなかった。立ち上がるうとも足がもつれ、内臓が軋むように痛み、それ以上の動きを封じてくる。

だが、結果的には怪人の掌から電撃が迸ることも、その手がライの首をねじ切ることもなかった。

代わりに怪人は「なるほどー」と素っ頓狂な声をあげた。「妹たちには聞いていましたが、こんなところで会うなんて、驚きですー」とさらに感嘆の声をあげる。それから構えを解き、それから食い入るようにその単眼でライの全身を嘗め回すように見つめた。

呆氣にとられる直也とライの前で怪人の体は萎み始めた。先ほど少女の姿から変質したのと全く逆の工程をたどって、そのシルエツトは人間のものに成り代わっていく。

そうして少女の姿に戻った怪人は、表情を隠していたフードを片手で取り去った。そうして少女自身が自ら明かしたその顔形を前に、直也は息を止める。ライが後ずさりながらひつ、と声を漏らした。

怪人から変貌を果たした少女の相好は、1つの狂いもなく、だが狂っていないければおかしいほどに正確だった。

少女は　ライと、まったく同じ顔をしていた。

目も鼻も口も同じ形で、その全容はまるで鏡映しのようにそっくりだった。異なる点といえばライの髪が燃えるような金であるのに対し、少女は艶のある黒髪であることくらいだった。そして意識して聴いてみれば、その声も声質から声調から、全てがライと一致した。この少女と出会った時に感じていたデジャブはこれだったのかと、直也は今更ながらに気付いた。

「馬鹿な……」

驚愕に声が裏返る。体を硬直させたまま、ライと少女とを思わず見比べてしまう。

2人の姿は何度見ても、まったくの写し身だった。見れば見るほど違いがない。直也はこのあまりに現実離れた光景を前に、熱に浮かされていた時と同じように、自分の実体が遠ざかっていくような

感覚にとりこまれていた。

サクリファイス 1

橋の欄干にもたれかかり、彼女は虚ろな目で恋人のいない世界を眺めていた。

彼女がこの場所に座り込んでから、すでに3日が経過していた。初日こそ下心をぶらさげながら声をかけてくる浮ついた男たちや、同情をあげ広げて近づいてくる人々の姿があつたが、今ではそれもない。通りがかる人々は死んだように俯く彼女のことを奇異の目で見つめた。

肌は荒れ、髪は乱れ、目は隈で窪み、唇は割れ、全身から鼻を突くような臭いを生んでいたが、彼女は全く気に掛けなかった。炎天下の中、水一滴さえも口に含んでいない。飢えも渴きもあつたが、心の軋みの前ではその苦痛も微々たるものだった。

以前、自分で手首を切り、いまはようやくかさぶたになった跡が無性に痒かった。気がつけば傷口を爪で搔つており、いまやかさぶたは完全に剥がれ、彼女の手首からは血が滴り落ちている。止まってもすぐに自分で搔つてしまったため、この3日間、流血が絶えなかった。

およそ1週間前、彼女の恋人はいつも通りの快活な笑顔を残し、彼女の前から去っていった。お気に入りのバンドナを頭に巻き、彼女に挨拶を言い放って、後ろ手にドアを閉める。実は彼女はその朝から、嫌な予感を覚えてはいた。今日離れたら、もう二度とその姿を見ることは叶わないような、そんな気はしていた。

だが、彼を引きとめることはできなかった。一緒に連れて行つて欲しいとも言つたが、「大事な仲間とのパーティーなんだ」と柔らかかに断られた。

そして彼女の予感的中した。彼は帰ってこなかった。きっと、ひ

よつこりと帰ってくるに違いない、と彼の家で待つていたが、日に日に絶望は積もるばかりだった。

4日経ち、彼女は恋人が死んだことを確信した。彼はもうこの世にいない。あの笑顔をもう二度と見ることはできない、あの大きな手で頭を撫でてもらうこともできないのだと理解すると、そこで初めて涙が出た。そして彼の痕跡の残る家に行かせることが居たたまれなくなり、また彼をみすみす危険な場所に行かせてしまった自分が許せず、彼女は家を飛び出した。

彼女には家族がいなかった。家を宛てにできるような友人もいない。恋人は彼女の全てだった。彼女の存在を一切の見返りなく、認めてくれたたった1人の存在だった。だから彼のいないこの世界に彼女の居場所があるはずはなく、彼女は自分の落ちゆく場所も見失った。いつしか彼女の中で昼夜は混ざり、そのうち時間の概念すらも消失した。ひたすらに泣き叫び、気を失うようにして眠り、夢と区別のつかないおぼつかぬ意識を時に委ねる。彼女は確実に、ゆつくりと死に近づいていた。そして彼女自身、それを望んでいた。この世に彼女のいていい場所など、少しもなかった。

もう少しで、彼の待つ世界にいくことができる。困憊した意識の中でそれを考えると、彼女は幸福だとさえ思った。あとは時に身を任せればいい。そうなればこの痛みからも、悲しみからも解放され、自由になれる。

濁った彼女の視界を、近づいてくる足音が明瞭に灯した。沈んだ意識を現実に取り戻され、彼女は弾かれるように顔をあげた。なぜかその足音が恋人のもののように聞こえた。彼女は恋人を愛するがあまり、その全てを知っていると自負していた。理屈ではなく、本能的に体が彼の気配に反応してしまう。そんな自分を、彼女は好きでたまらない。彼女は彼がいなければ生きていけない自分に酔い、彼に支配されていることに快感を見出していた。

だから、彼に違いない、と顔をあげるまでの間、彼女は信じてやまなかった。彼が帰ってきたのだ、と淡い期待に取りつかれた。

「……秋護！」

安堵が滲み、彼女は恋人の名前を懇願に近い気持ちで叫ぶ。しかし仰いだ視線の先に恋人の姿があるはずもなく、そこには彼女の見知らぬ男性が立っていた。頭を白一色に染め、睫毛の長い、鼻筋の通った顔立ちの男だった。

その髪の色と真逆の色をした喪服を着こみ、背広の胸ポケットからは百合の造花が覗いている。首からはロケットを2つぶら下げている。陽光を背にした男はやつれた彼女の表情をじっと見下ろし、それから人の良い笑みを浮かべた。

「こんなところで、どうしたんです？　悲しい目をしている。美しい顔が台無しだ」

彼女は男の言葉を、表情を凍らせたまま、空虚な気分で聞いている。無念さが胸にこびりつくようで、まだ甘い期待を寄せていた自分自身に絶望し、そのせいで彼女の心はなおさら深く抉られていく。一層自分が憐れに思え、彼女は口をぽかんを開けたまま涙を流した。「突然申し訳ない。私の名前は後藤田といいます。あなたは春見、ゆきのさん、でよろしいですね？」

男の背後には青い縁の眼鏡をかけた女性が立っていた。彼女はアタッシェケースを両手で持っていた。その頭にも、百合の造花が花飾りにされている。

ゆきのはまるでお湯に溶かれた氷のように、じわじわと表情を変化させる。今だ輪郭のはつきりしない頭の隅で、なぜこの男が自分の名前を知っているのかと不審に思った。やはりどこかで会ったことがあるのだろうか？と男の顔を凝視するが、やはり思い至らない。

首を傾げるゆきのの前で、後藤田は快活に笑った。

「安心していい、初体面です。しかしあなたの顔を見れば、どれだけ恋人のことを愛していたのか、よく分かります。心情お察しいたします。本当に辛かったでしょう。突然抛り所を失ってしまつて、いま、あなたは絶望の淵に立たされているのかと思うと、まことに不憫だ」

後藤田はゆきのの前に屈みこんだ。その体からは線香の匂いがした。彼はゆきのに顔を寄せ、内緒話をするかのように声を潜めた。

「……どうです、また彼に会いたくは、ありませんか？」

ゆきのは茫然と、この男のひどく整った顔立ちを眺めていた。会いたいに決まっている、と胸の中で叫んだ。もはや口は息を吸い、吐くだけの器官に落ちぶれていたので、声は出なかった。それでもゆきのは、現実感の伴わぬ頭で強く思った。また秋護と会いたい。そのためだったら、どんな罪でも犯すし、どんな罰でも受ける覚悟だった。秋護を救うことは、彼女にとって世界の秩序を取り戻すことと同義だった。

だが、それがありえないことなのは承知している。

ゆきのの心中に滾るものを読みとったのか、後藤田は心の底から嬉しそうな　しかし、ひどく歪んだ笑顔をみせた。

「ありえますよ。ありえないことなど、この世にはない」

後藤田の酷く落ち着いた声に、ゆきのは少しだけ、自分が動揺するのを感じた。しかしずっと疼いていた手首の痒みが、男の言葉で急に止んだのは妙だった。ゆきのは男の優しげな笑みに引きこまれた。

「奇跡は起こります。願いは叶います。そのために、我々はあなたのもとに参りました。あなたを、この地獄のような世界から救うために」

後藤田の両目の虹彩が金に変わる。驚くための気力さえないゆきのは、その男の変貌を当然のように見つめている。元より夢心地だった。ああ、こういうこともあるんだと、それだけを思った。

「リレイ・ボーン」にようこそ」

後藤田が掌をゆきのの顔にかざす。そこからまるで間近でカメラのフラッシュを焚かれたかのような、強烈な光が発せられた。そしてゆきのは白々と照る光を目に捉えながら、落ちていくような目眩の中で気を失っていった。

3話「残された光」

魔物の話 42

悠が今日から通い始めるといふバイオリン教室は、駅近くの雑居ビルの3階にあった。

1階は不動産を経営しており、2階は携帯電話ショップになっている。3階の窓にはポップ調の文字で、『バイオリン教室 生徒受付中』との貼り紙があった。その真上の階は空室になっているようだ。窓にはテナント募集と書かれた貼り紙が見える。

「悠、本当にここまで大丈夫？」

ビルを昇るためのエスカレーターの前でレイは尋ねた。悠はエレベーターの扉を背後に振り返ると、にっこりと微笑んだ。

「うん。大丈夫。いつまでもレイちゃんやたあくんに頼ってられないもん。ここから先は、1人で行きたい。行ってみたいの。私だってもう、15歳だもん。自分だけでこの一步は踏み出したいの」階数表示を知らせるボタンから光が失せ、エレベーターの扉が開かれる。レイは頬を緩め、そんな親友の言葉を頼もしく思った。

「悠がそうしたいなら……それが、一番いいよ」

レイの言葉に悠は可愛らしく頷いた。それからレイの隣に立つ佑とも視線を交わす。「悠、本当に大丈夫か？」と憂い顔を浮かべる兄の手を、悠は握りしめた。

「たあくん。今までありがとう。私、頑張ってくるね。今よりも強くなつて、帰ってくるから心配しないで」

今にも泣き出しそうな様子の佑を慰める悠に、レイはこれではどちらが年上なのか分からないな、と苦笑を漏らす。佑は唇をへの字に曲げて力強く頷いた。「頑張つてこいよ」と告げる声は、僅かに震えを孕んでいた。悠はうん、と明朗快活に体を揺らすと、佑から離れ、レイを見て恥ずかしそうに笑んだ。

「じゃあ、レイちゃん、たあくん。頑張ってくるからね！」

悠は並んで立つレイと佑に手を振ると、そのまま後ろ向きにエレベーターに乗り込んだ。その顔は最後まで満面の笑みに彩られていた。レイも笑って手を振る。まるで旅立つ者を見送るような気分だった。悠はここから新しい生活に踏み出していくのだ。寂しさは残るが、未来に向けて進んでいこうとする彼女の船出を今は心の底から祝おうと思った。

それから数秒と経たぬうちに、レイと佑の前でエレベーターは閉じた。しばらくその赤茶色の扉を見つめ、そこに感慨深さを覚えながらレイは佑のほうに顔を向けた。

「行っちゃいましたね。教室の雰囲気は合えばいいですけど……」

レイは途中で言葉を切った。見開いた目の先に、不安を全身に滲ませる佑の姿を認めたからだ。彼は固く閉じたエレベーターの扉を見つめたまま、何やらぶつくさと呟いている。

「大丈夫かな悠。先生に怒られないかな。いい友達ができるのかな。いじめられたりしないかな。うまく演奏できるのかな。ちゃんとお話できるのかな。トイレに行きたいって自分から言えるのかな。ちゃんとトイレできるのかな。お腹空かせてやしないかな。心配だなあ、心配だなあ」

「とりあえず黙ってもらっていいですか。これ以上喋ったらはったおしますよ」

「だって心配じゃないか！　悠が一人でこんなところにくるなんて始めての経験なんだし」

「じゃあ、授業参観でもすればいいじゃないですか」

「しようと思ったさ。でもあそこ生徒が女性だらしくてさ、それ言い出したとき、すごい白い目で見られた。悠にも止めてって言われた」

「当たり前です。お兄さんはアホなんですか」

「でもさ、悠は長い間、病院で過ごしてたし、あんまり学校にも行けてないからさ、こういうたくさんの人と一緒にいる機会っていうのが普通の人より格段に少ないんだよ。社会の荒波に揉まれ慣れて

ないっていうかさ。ちょっと厳しくされただけで泣いちゃったり、落ち込んだりったりするかもしれないじゃん。あの教室の中だってさ、どんな奴がいるか分からないわけだし。もしかしたら悠をいじめる奴がいるかもしれない。陰湿ないじめとか、暴力とか受けるかもしれない。そういうことを考えるとさ、俺はやっぱ心配なんだよ」

「えー」

おどおどと何だか忙しない佑を前に、レイはため息を零した。佑は妹のこととなると我を忘れてしまう。いつもは大らかな佇まいをみせる彼だが、そこに悠が関わると、過度の心配性へと変貌してしまう。それは、悠の事を大切に思っていて、悠の事がそれほどまでに愛しているという何よりの証拠であり、微笑ましい光景ではあるのだけれど、レイはそんな佑のことが時々心配になる。

佑は必死になっている。妹を奪われやしないか、どこかに行ってしまうわないか、ひどく過敏になっている。それが動揺となって表に出してしまう。不安を抱えた佑の表情は、とても真剣で、だからこそレイの胸を打つ。心に届いてしまう。このまま放ってはおけないという気にさせられてしまう。

悠は一度、病室で怪人に襲われたことがある。さらにその数年前には二条裕美によって、誘拐されそうになったこともあったらしい。そんなことが立て続けに起これば、警戒心が働くのも当然といえば当然だった。佑の不安を否定することはレイにはできない。だが、脅えているだけではどうにもならない。様々な恐怖を体に刻み込まれ、しかしそれでも屈することなく、乗り越えることができた今のレイだからこそ、彼を元気づけてやりたいと心から思った。

佑はエレベーターの前から動き出せない。その不安に震える横顔を見つめながら、レイは顎に手をやり、考えに考えを重ねる。

必死にどうするべきかを熟考し、様々な想像を膨らませ、最良の選択を求めたその末に。

レイは佑の脛を、つま先で蹴りあげた。

「せいやつ！」

「痛っ！」

何の前触れもなく打ちこまれた急所への一撃に、佑は屈みこんで静かに悶える。ゆっくりと顔を起こし、レイを見上げるその目には動揺と脅えがまざまざと滲んでいた。

レイは腕組をすると、佑が何か言葉を発するより前に口を開いた。「顔が固くなってますよ。いま悠が帰ってきて、お兄さんの顔をみたらどう思います？ きつと何があったんだって、不安になりますよ。お兄さんが怪我をして帰ってきたときだって、あんなにうるたえていたんですから。あんまり、悠を心配させちゃダメです」

佑は顔をしかめながら立ち上がった。レイの蹴った箇所が痛むのか、片足立ちでけんけんをしている。一体何が起こったのか分からない、というような面持ちの佑を正面に捉え、レイは微笑みを表情に宿した。

「不安を出さないで、っていうのは無理かもしれないですけど、やっぱりお兄さんがそういう顔を見ると、悠も困っちゃいますから。だから、笑って迎えましょうよ、ね？」

佑は目を見開いた。だがすぐにまた顔を俯かせる。その表情にうつすらと影が射す。レイが言っていることの意味は理解しているのだろう。しかし心まではそう簡単には伴わないらしい。

レイはまた佑の脛を蹴った。先ほどと逆の足を選んだのはせめてもの情けだ。佑は呻き声をあげて、再び地面に崩れ落ちた。

「次にそういう顔をしたら、また蹴りますから。お兄さんが笑うまで蹴ります。足の皮がはがれても、血飛沫があがろうとも、骨が折れようとも、止めませんから」

腰に手を据え、仁王立ちのポーズで佑を眼下に置く。佑は唇の片端を引き攣らせるようにしながら、レイを見上げる。やがてその口から笑みが漏れた。

「レイちゃんは、やっぱり恐ろしいな……敵わないよ」

「私のお父さんを誰だと思ってるんですか。悠なら大丈夫ですよ。」

ああ見えてしっかりしてるんですから。私たちがしなくちゃいけないのは悠が前に進めるように、未来に進めるように、それを邪魔する脅威から悠を守ることです」

レイは3階の窓越しに見た、あの背の高い女性の姿を思い出す。おそらくあの女性が先生なのだろうとレイは直感で判断した。大らかで、優しそうな人だった。あの人ならば悠が歩もうとする第一歩を祝福してくれるだろうと思った。

「先生も良い人そうだったんでしょう？ だからお兄さんも悠がこの教室に行くことを許したんじゃないですか？ だったらあとはどう転ぶかは悠の頑張り次第ですよ。私たちはそれを信じて待ちましようよ」

佑は立ち上がり、それから決然とした様子で顔をあげた。晴れ晴れと、まではいかないものの、その表情からは翳りが少し薄れていくことに気付き、レイは心底安堵した。思わず頬が緩む。佑はレイを見て、1つ頷いた。

「……そうだな。うん。そうかも。一番悠を不安にさせてたのは、俺だったのかもな」

「蹴ったことは謝ります。でも、そんなに気負わないでください。お兄さんは1人じゃないですから。さつきも言ったでしょう？ 悠を好きな気持ちなら、私はお兄さんにも負けません。私がいいます。私も全力で悠を守りますから」

レイが自分の胸を叩き、力強く言い放つと、そこでようやく佑は破顔した。憑き物が落ちたような、それは清々しい、まさにレイが待っていた表情だった。

「ありがとう、レイちゃん。なんか、すげえ楽になった。そう言ってもらえて、助かったよ」

「感謝なんて別に。私はお兄さんを蹴飛ばしただけです。悠が頑張ってるんです。私たちも、頑張りましょう」

そうだな、と佑は脛をさすりながら言った。言って、エレベーターの固く閉ざされた扉を見つめた。エレベーターを乗り降りする人

の姿はいなかった。その扉はまるで自分は壁だとも言い張るかのよう沈黙を守り続けている。

レイはひんやりと冷たい壁によりかかり、陽に照らされた表通りの方を見やった。

目の前ではスクランブル交差点を渡ろうと、多くの人たちがこの暑さの中、信号待ちをしていた。太陽は高く、町中をむらなく焼いている。陽光に照らされた建物や人々の足元からは影が伸び、冷やかな空間を地面に切り出している。向かいにあるビルの窓が、光を浴びてきらきら輝いている。

斜向かいの信号機の上に、カラスが止まっている。辺りを窺うように首を巡らせ、足の下を間断なく通り過ぎる車の群れを、不思議そうに眺めている。

蒼穹に黒い羽をひらりと落とし、やがてカラスは飛び立っていった。まるでそのタイミングを計ったかのように、佑が口を開く。

「そういえば、レイちゃん」

「はい？」

レイは佑を見た。彼の拳動にはもはや狼狽の色は少しも見つからなかった。その頬を軽やかな風が撫でる。佑はレイの隣に立つと、同じように壁に寄りかかった。

「マスカレイダースからの連絡は、まだないの？」

レイの耳元に少しだけ近寄り、佑は小さな声で言った。レイは耳に伝わる佑の温かい呼吸に少しだけどきりとしながらも、冷静さを保って答えた。

「……私の耳には入ってこないですね」

マスカレイダースの名称は以前ならばこれほど頼りに感じるものはなかったが、今ではその名を聞くだけで嫌悪が先立った。佑もまた表情を曇らせている。

「お父さんのもとにもないって……そういうこと、だよな」

「まあ、そういうことですね」

「そっかー……いや、戻りたいとは思わないけどさ。いないと実際、

かなり難しいよな。戦力でも、情報っていう面でも」

「そうですね……」

マスカレイドーズに戻る気持ちは微塵もなかったが、それでも組織の後ろ盾を失ったことはレイたちにとってかなりの痛手だった。悠を守るうと一口に言っても1週間前に比べ、できることはかなり制限されている。それに状況はかなり逼迫してもいた。

「あれからマスカレイドーズが動いた話は俺も聞かない。怪人もな、だけどこれで終わったとは思えない。多分……あいつらはこれから、何かを仕掛けてくる」

「それは……同感です」

むしろレイは今の状況を不気味に感じていた。この束の間の平和が、どうしても台風の前静けさとしか思えない。レイの最高の怪人としての直感は嵐の時を明晰に捉えている。

「そういえばレイちゃん、前に言ってたよな」

風が届けてくれる悪意の匂いを嗅ぎ取ろうと、周囲に気配を張り巡らせていたレイに佑は言った。レイは視線だけを彼の方に移す。

佑は眩しいものでも前にしたかのようにわずかに目を細めた。

「怪人の気配を感じ取れる、生まれつきの力があるって」

「……ああ」

レイは動揺を無表情の内側に隠しながら、彼の心中を推し量ろうとする。

「言いましたけど」

マスカレイドーズ内での自分の立場を説明するために、レイは自分の力のことを曖昧に説明した。自分が怪人であるということを告白するだけの勇氣はなかったが、怪人の気配を嗅ぎとれるという点については白状しないことには事が進まなかった。少なくとも、生まれつき持っている力、という部分に嘘はない。

レイが明らかにした荒唐無稽な話を、佑は疑うわけでもなく、怪人との繋がりを予測して敵意を剥き出しにしてくるわけでもなく、額面通りに受け取ってくれた。それ以上の追及もなく、話をしてか

ら5日余りがたつものの、話題に昇ることすらこれまでなかった。

だから佑がその話を口にした時、ついに来たか、と思った。「怪人の気配を生まれつき感じ取れる人間」など、そんな都合のいい存在があるわけはない。少し考えれば分かることだ。

怪人の気配を 同族の匂いを嗅ぎとれる怪人、の存在のほうがまだ実在することに信憑性がある。次に佑のその薄い唇からどんな言葉が続くのか、レイは唾を呑みこみ、髪の手先を指先でいじりながら待った。気が気ではなく、自然に表情が強張ってしまう。

佑は自分の左手にはまった、いかにも安そうなプラスチック製の腕時計に目をやった。そしてぼつりと呟いた。

「2時間だ」

「はい？」

レイは首を傾げた。佑はレイの方を向くと、真剣な顔で続けた。

「悠のレッスンは終わるまでの時間だよ。ここは駅前で、今は昼間で、しかも教室にはたくさん生徒がいる。あの夜の病院とはわけが違うんだ」

「……何が言いたいんですか？」

佑の言葉の真意が見えず、レイは眉根を寄せる。佑は壁に対して斜めに立った。

「俺、ずっと考えてたんだよ。悠を狙って近づいてくる怪人を叩くことももちろん大事だけど、それだけじゃ足りないんじゃないかって。俺たちも、攻めなきゃいけないんじゃないかって」

「まあ、確かにそうですね」

レイは頷く。そこでようやく彼の言わんとすることに見当がついてきた。壁に寄りかかって会話を交わすレイと佑の前を、背広姿の男が通り過ぎていく。男は壁のボタンを押して扉の前に立ち、エレベーターが来るとそれに乗りこんでいった。その扉が完全に閉じるのを見届けてから、佑は口を開いた。

「やっぱり悠の側を離れるわけにはいかないからさ。今まではレイちゃんにそういうこと任せてばっかで、俺はできなかった。だけど

今なら、それができる。2時間だけなら俺も動くことができる」

佑の目は覚悟を決めた者のそれだった。たった2時間。だが2時間妹の側から離れるということが、彼にとってどれだけ心細く、恐ろしいことなのか、レイはその気持ちを酌んであげたかった。レイは佑のその強い眼差しに引き込まれる。しばらく見つめあったあとでレイは喉を鳴らし、こくと頷いた。

「レイちゃん、一緒に来て欲しいところがあるんだ。付き合ってくれない？」

レイは軽く首を傾げた。長い金髪が肩から滑り落ち、空を撫でた。佑は神妙な顔をしている。周囲には雑踏が広がっているのに、レイは彼と向き合うこの瞬間、まるで世界に2人だけ取り残されたような錯覚に陥った。

鎧の話 33

そのライとまったく同じ容姿をもった少女は一步前に足を踏み出すと、口元を柔和に緩めた。

「びつくりですー。本当に私と同じ顔をしていますー。まさに偶然の一致ですー」

さらに半歩、足を進め、ライとの距離を詰める。2人の間にはもはや2メートル弱のスペースしかない。同じ顔をした人間同士がこうして向かい合っているのを見ると、それだけで目眩がしそうだった。足元が崩れていくような錯覚を覚える。直也はしばらく虚脱しながら、そのあまりに現実離れた光景に目も意識も奪われていた。

「お前は、一体誰ですかー？」

首を僅かに傾げ、ライの顔で、ライが絶対に浮かべることはないであろう妖艶な笑みを浮かべて、少女は疑問を口にする。

「おかしいですー、それは鉈橋そらのものであるはずですー」

鉦橋そら。

少女の口から発せられたその人名は、直也の意識をこの場に取り戻させた。瞬間的に1週間前、旧鉦橋邸で入手した写真のことが脳裏を過ぎる。その家族写真に写っていた鉦橋そらという少女の顔は、ライとまったくの瓜二つだった。それを目にした時、直也は今感じているのと同じような深い動揺と恐怖を覚えたものだ。

なぜ今、この怪人がその少女の名前を口にするのか、直也には一瞬分からなかった。だが不意に旧鉦橋邸で会った怪人の創造主たる白衣の男の言葉を思い出し、すぐに得心に至る。

あの人間は、グリフィンの生前の姿だ。生前の記憶も持っている。最近作り出したんだがね。どうだ、面白いだろう？

麦わら帽子を被った少女から姿を変容させた鷲型の怪人、グリフィンを指してあの男はそう講釈を垂れていた。怪人は人間の死体から生み出される。そして、この今目の前に立つ、怪人から変化した、ライそっくりの少女もまたその方式に則ってこの世に生を授けられたのだろう。

そこまで理解すれば、この少女の正体に対する結論を出すのはあまりに簡単なことだった。

「まさか、お前は……」

男の声を頭の中に反響させながら、少女の姿を見つめ、直也は身震いした。

ライは先ほどから、怯えた目で自分と同じ顔の造形をもつ少女を見つめている。少女はライに手を伸ばすと、その頬に優しく触れた。ライは首筋に氷でも押し当てられたかのように、びくりと体を震わせる。

その一方で少女は苦しげに顔を歪めた。痛みを訴えるように胸を押さえ、慌ててライの体を突き放す。後ろに転げ、尻餅をついたライの顔色も心なしに青い。少女は何か恐ろしいものを見るような目つきで、怯えるライを見下ろすと、それから取り成すように嗤った。

「ふふん。まあこの際、どうでもいいことですー」

唇を鋭く歪ませて、冷酷に、嗜虐的に、ライを見て微笑む。その瞳に薄く金色の光が灯るのを、直也は見逃さなかった。

「この場所に足を踏み込んだ、自分たちの不運を呪うですー」

「ライ！」

直也は腕の痛みを堪えながら、ポケットに手を突き入れ、中からプレートを取り出した。周囲を探るまでもなく、パツと目についた反射物　カウンター脇にかけられたアンティーク調の鏡に跳び付くと、その鏡面をプレートを持った腕で殴りつけた。

肩から振り落とすようにして固いプレートを打ち放ったので、鏡には甲高い呻きと共にヒビが入ったが、それを気にする余裕もない。そして直也が認識するよりも早く、その亀裂の走った鏡より、複数の装甲片が飛びだしてきた。

怪人に向けて跳びかかる直也の後を、パーツたちも負けじと追いつがつてくる。それは数秒も経たぬうちに直也を追い越し、そして挟みうちをする形で、駆ける直也の体に次々と取りついていった。

やがて直也の体はあますことなく装甲によって包まれた。表情を鉄仮面で隠し、装甲で身を固め、関節や首もとを黒いスーツ状の素材で覆う。

そうして装甲服の戦士、オウガとなった直也は空中で刀身の折れた刀を腰だめより引き抜き、ライの前で中腰になっている不気味な少女へと躍りかかった。

「……ははあ、これは驚きですー」

少女はオウガを認めると、再び怪人に姿を変えた。ペンギンの意匠を胸に掲げたその怪人はオウガの攻撃を横に跳んでかわすと、右手をかざし、その掌中より青白い電撃をオウガ目がけて撃ち放った。着地したオウガは振り向きざまに折れた刀を一降りし、電撃を空中で捉え、弾き飛ばした。爆ぜた電撃が細かな火花となり、空中に飛散する。続けざまに放たれた電撃も、さらに刀で振り払う。直也の手には痺れるような痛みが残った。

全快にほど遠い体はまるで鉛の鎧でも引きつれているかのようだ

つたが、感覚の方はかえって健康な時より研ぎ澄まされているように感じた。熱が余計な考えや感情をシャットダウンさせ、そのために本能が浮き彫りになっているせいかもしれない。

「まったく、マスカレイドーズが出てくるとは……面倒くさいことになったですー」

怪人は首を傾げて悪態を吐くと、今度は左手を前方にかざし、そこから冷気を放出した。オウガは横に転がって直撃を避けると、身を起こしながら前方に飛び込み、力任せに怪人に切りかかった。

だが、その少々勢い込み過ぎたオウガの攻撃は不発に終わった。怪人はオウガの太刀筋を片手でいとも容易く受け止めると、逆の手でオウガの首を掴み、そのまま頭上高く持ちあげた。

「このまま、絞め殺してやるですー」

人知を超越した指圧で動脈を圧迫され、呼吸が詰まる。怪人の手からの解放を求め、直也は必死にもがいた。しかし足をばたつかせ、怪人を蹴りやるも、その体はびくともしない。

そうしているうちに、オウガの首を絞める怪人の左手から冷気が放出され始めた。それは直也の息の根を止めるためのため押しに思えた。急激な冷却が血液の循環を阻害し、脳の動きを緩やかに凝らせていく。冷たさを感じるよりも前に、感覚が麻痺した。装甲を超えて冷気が素肌に浸透してくる。徐々に体が言うことを聞かなくなり、脱力感が神経を侵す。

それでもこの眠気に取り込まれるわけにはいかなかった。

直也は右手をがむしゃらに振るうと、その手に握る刀の柄で怪人の腹を二度三度と突いた。全身の神経を右手一本に集中させ、力任せに腕を突き出す。その遮二無二放った一撃が偶然急所を決ったのか、怪人は呼吸を詰まらせ、たまらずオウガから手を離れた。

直也は床に転がり、激しく咳き込んだあとで、大きく息を吸い込み、酸素を全身に行き渡らせる。首元の装甲が凍り付いてはいたものの、直接体に影響は残らなかったのが幸いだった。足をもつれさせながら何とか平衡感覚を探り、立ち上がる。顔をあげると、すで

に怪人は振り上げた右手の掌に青白い光を宿していた。

「か弱い少女の腹を殴るなんて、信じられないですー。ダメ男ですー。訴えてやるですー」

「うるせえよ。お前なんだろう？ 柳川さんたちを、マスターを、客を殺したのは。一体、何でこんなことを！」

「ごちゃごちゃうるせえですー。ただの1つとして、お前なんかに答える義理はねえですー」

直也が質問を終えるのを待つこともなく、怪人はその手に満ちた雷の奔流を放出した。

直也は舌を打つと再び感覚を研ぎ澄まし、反射的に刀で電撃を防ごうとする。だが青白い光は刀身に触れた瞬間、爆発的に膨れ上がり、直也の腕に食らいついた。

何度も攻撃を受け止めた手首はすでに限界を迎えていた。それこそ骨を割られたのではと思うほどの衝撃が腕一本に爆ぜ、握る力を失ったオウガの手から刀が抜けた。オウガの体も散り散りに舞う火花とともに吹き飛ばされ、入口のドア付近の壁に頭から突っ込んだ。

直也は黒い煙の立ち昇る腕の装甲を見やり、そこに疼く強い痛みに、仮面の下で顔をしかめる。

視線を彷徨わせるが、手の届く範囲に刀を見つけることはできなかった。おそらく宙を舞い、直也の手の届かないところに飛ばされていつてしまったのだろう。直也は唯一の武器を失ってしまったことに深い絶望を感じながらも、それでも左腕を床に付き、よろよると身を起こす。目前に怪人の異形が立ちはだかっていた。

「私の攻撃からは、逃げられないですー」

冷酷に言い放つ怪人の両手には青白い輝きと、白銀の煙霧がそれぞれ纏われている。オウガは弱々しく構えた。怪人は両手を振りかざし、襲いかかってくる。襲いくる怪人の攻撃を止めたのは、またしてもライの発した大声だった。

がつん、と鈍い音が宙に響き、続けて怪人の体が横によるめいた。その足元に何かが落下し、耳を覆うほどの巨大な音を発する。床に

ヒビを作り、影の上をごろりと転がったその円柱状の物体は改めて確認するまでもなく、どう見ても消火器だった。

「おっさん！」

驚き、竦む直也の下に、ぜえぜえと喉を震わせたライが駆け寄ってくる。怪人はカウンターによりかかり、頭を押さえて呻いていた。その悶絶する姿と、己は無関係とばかりに床に寝そべる消火器を交互に見やり、直也は遅れて事態に気付く。あれだけの重量のあるものをぶつけられたら、怪人であろうとひとたまりもないだろう。そしてそれをこの場でぶつけるような人間は直也のほかに、1人しかない。直也は自分の手に縋ってくる金髪の少女を見下ろし、オウガのマスクの下で苦笑いを浮かべた。

「ライ。この場合は、逃げるぞ！」

直也はライの手を強く握り、慌てて踵を返す。刀を失い、体調も万全ではない今の状況はあまりにも不利だった。直也1人ならばがむしやらに勝利の道を探ることもできるが、今はライがいる。あまり無謀な選択はできない。柳川らの死体を置き去りにし、怪人をこの町の中に放っておくことに躊躇いはあったが、それ以上にライを失いたくなかった。それにここでもし自分が死んだら誰がこの惨状を伝えるのか、という気持ちもあった。

「ふざけたことを、しやがって、です」

直也の言葉を聞きつけたのか、怪人はよろめきながら振り返り、顔をあげ、電撃を指先から放出してくる。しかし頭部に受けた衝撃のために狙いを定める余裕もないのか、その青白い光は不安定な軌道を宙に描く。直也は腹に据えたプレートを引き抜くと、自分の体からオウガの装甲を分離させた。

直也の体を大きく迂回した装甲のパーツたちは宙を舞うようにして移動し、電撃を遮ると、怪人の背後のアンティーク調の鏡に次々と飛び込み、去っていった。直也は防御を装甲たちに委ねるとライの手を引き、手を伸ばしてドアを押し開く。その向こうには陽光の下で煌めく、元通りの日常を抱えた世界があった。背後で迸る閃光

を置き去りにして直也は、矩形に切り取られたその景色へと駆け足で飛び込んでいった。

魔物の話 43

電車で揺られ、駅で降りて歩くこと15分。佑に連れて行かれるままにレイがたどり着いたその白い家は、住宅街の隅にひっそりと存在していた。

地理的にみれば、この家の所在は埼玉県にあたる。だが感覚としては東京の端っこという印象が強い。実際、ここから幾ばくか離れた場所に引かれている線路を超えればすぐに東京だった。レイの隣に立つ佑は携帯電話を開き、時間を確認している。2人で行動することが許された制限時間は、たったの2時間だ。考えながら行動する必要があった。

赤い屋根に白い外装。庭には天然の芝生が敷かれている。かつては色とりどりの花が咲き乱れていたのだろうが、今、それらの多くは汚れ、褪せ、枯れて黒ずんでいた。

レイは薄気味悪く濁っていこうとしている庭園を眺め、顔をしかめる。やがてこの暑さにやられ、そう時間を要しないうちに草花たちは全て枯れて腐っていつてしまうのだろう。その景色を思い浮かべるだけで、うんざりした。この世にあるのは流れ、褪せていくものばかりだ。父親が入院してからというもの、レイはそんなことをよく考えるようになった。

家の敷地内には入らず、佑は門の前でその家をじっと見上げていた。その横顔は寂しそうでもあり、また懐かしそうでもあった。レイは陽光に照らされ、頬に汗を浮かべる彼をしばらく眺めてから、家の方に視線を移した。

「この場所で……オウガと出会ったんですか」
道中で交わした佑との会話を思い出しながら、レイは隣に立つ佑

に尋ねた。1週間前、佑はゴンザレスに命じられ、この家に向かった。オウガの装甲服を奪うため、マスカレイダーズの一員として認められるため、装甲服の力で悠を守るため、佑は人間同士で戦いたくないと訴えつつも、オウガの所有者に戦いを挑みにいった。

病院で小指同士を絡め、約束を交わした日のことがレイの脳裏に蘇る。その後、佑は左手に大けがを負い、体中に傷を作って帰ってきた。

レイと別れたあと、佑の身に一体何が起きたのかレイは知りたかった。そうすれば佑の心に今よりもずっと近づけるような、そんな気がした。レイは彼の心に触れたかった。

佑はうん、とだけ返事をした。それは空返事に近かった。レイは前を向いたままさらに尋ねる。

「オウガって、どんな人だったんですか？」

「……分らない」

ぼんやりと目を眇めて彼は言う。その後で、だけど、と続けながらようやくレイに視線を転じた。正面から見る佑の顔色は、まるで白けた空の色のように心許なかった。

「だけど、悪い人じゃ、なさそうだったよ」

佑は哀しげに目を細める。なぜ佑がそんな顔をするのか、レイには何となく理解ができた。もしオウガの持ち主が極悪非道の人間だったならば、佑もここまで心を痛めることはなかったに違いない。悪い人ではないことがわずか数分足らずの出会いでも分かってしまったから、だから佑は罪悪感に捉われているのだろう。

「でも、俺が負けたのが今では幸いかな。俺も死ななかったし、相手も死ななかった。それだけは、良かったと思ってるよ」

そう吐露する佑の言葉はおそらく本心で、レイもそれを聞いて胸をなで下ろした。心のどこかでは心配していた。もしや彼は、オウガの装着者を殺してしまったのではないかと。彼の信念に反して人間相手に力を行使し、その末に、彼自身が誰よりも恐れていた事態に至ってしまったのではないかと。

だがその不安も彼自身の口から否定された。それを聞けただけで、ずいぶん心が軽くなったような気さえした。彼は人殺しにならなかったのだ。それは彼にとっても、そしてレイにとっても、とても大きなことだった。

「でも、この家にいたのはオウガだけじゃなかった。ここで怪人と……それから、あの男にも会った」

「あの男？」

まさか、とレイは勘を働かせる。胸に期待とおぞましい予感が一緒に沸いた。頭の中にしなびた果実のような顔をしたあの男の姿が現れる。

「式原明さ」

レイが男の名前を口に出す前に、佑がその正体を明かした。

「3年前、悠をさらおうとした一味だ」と語気を荒らげる彼の目に、不気味な光が宿る。

知っていたのか、とレイは声をあげかけた。その言葉を発するのを止めたのは、口を開いた直後に強烈な気配が頭の中に直接飛び込んできたからだった。

レイは顔を歪めた。

その気配は目の前に立つ、この白い家より発せられているようだった。それは怪人を察知した際に、脳内に現れるものとはまた別の感覚だった。それとは比較できないほどの大きな情報力がレイの脳を瞬間的に揺さぶる。視界が一瞬、白くぼやけた。その瞬間、なぜ佑が自分をこの場所に連れてきたのかレイは理解した。レイの“怪人の気配を知ることができる”という能力に期待を寄せ、式原のいたこの家に何か痕跡がないか、調べるつもりなのだろう。

ほどなくして意識が元の次元に帰ってくるのを待つことなく、体を擦じられ、すり潰されるような不快感がレイの肌に沁みて伝わってきた。指の1本すら動かすことさえ許されぬ重圧がレイを押し潰そうと、なりふり構わず殺到してくる。それは殺意を伴った、刺々しく、どす黒い瘴気だった。

それに必死に耐えようと身を凝らせ、両足に力を注ぐ。気づけば息があがっていた。体温が凍てつく瘴気によって、根こそぎ奪われていくようだった。顔面からスツと血の気が引いていく。

怖い、と心の底から震えた。目の前に聳えるこの家に立ち入らなければならぬことは分かっている。しかし勇む心は慄きへと変貌し、踏み出そうとする足は考えるよりも先に後ずさっていく。体と心がこの家にこれ以上、近づく事を拒絶しているのは明らかだった。その時、恐怖に絡め取られ、瞳を震わせるレイの体に温もりが射した。

顔をあげ、自分の手を見やると、そこに佑の手が重ねられていた。「怖い？」

佑の問いかけに、レイは首を縦に振る。いつものように強がることはできなかつた。気を少しでも緩めれば心が挫けそうだ。おそらく瞳もひどく潤んでいることだろう。体の芯まで凍えるようだった。そんなレイの手を、佑はさらに強く握った。

「こんなところに連れてきちゃって、ごめん。だけど大丈夫。俺がいるから。レイちゃんは、1人じゃないから」

レイは目を見開いた。佑は照れくさそうに口元を緩めた。

「俺さつき、レイちゃんにそう言われて、本当に嬉しかったから。だから、怖くなんかはないよ。レイちゃんが俺を助けてくれるように、俺もレイちゃんを助けるから。だから、安心していいよ」

レイはしばらく呆然と佑の顔を見つめ返し、それから我に返って、小さく顎を引いた。

彼から届く温もりが、脈の鼓動が、レイの身にとりついた恐怖心の澱を溶かしていつてくれるような気がした。

気づけば白い家から発散されていた瘴気は大分薄まり、体にかかっていた重圧は消失している。佑はレイからそつと手を離れた。レイは無言でそれに応じる。たとえば彼の体に触れていなくとも、レイは佑の体温を感じる事ができた。レイと佑はしばらく何かを通じ合わせるかのように見つめ合ったあと、2人して顔を背けて照れた。

もう、恐れるものは何もない。佑が隣にいてくれる限り、どんな暗い未来でも足を踏み外さずに進んでいけるような気がした。

「行こう」

家を見上げ、決然と佑は言い放つ。

「はい……行きましょう」

レイは頷くと、彼の背中に続いた。先ほどまであれほど怯えていたのが嘘のようだった。足取りは自分の体重を置き去りにしてしまったのではと疑うほどに軽やかだ。体中に熱が宿る。胸の奥がくすぐたく、それがまたレイの気持ちを昂ぶらせていた。

枯れた庭を横切り、玄関に近づく。佑がドアノブを掴み、軽く引くと、ドアに小さな隙間が生まれる。鍵は閉まっていなかった。レイと佑は視線を交わした。佑は頷くとそのドアを一息に開いた。開かれた世界を前にして、レイはまず、眉を顰める。

家の中にも庭と同様、荒廃の色が忍び寄っていた。一見華やかで整理されているように見えるが、よく見れば廊下の隅には埃がたまり、虫の死骸がところどころに転がっている。その中には毛虫も含まれていた。レイは唇を引き攣らせた。電灯の点いていない室内は薄暗く、黒々としたわだかまりがいたるところに住みついているかのようだ。ただ、長く空けた部屋に久しぶりに入った時に感じるような、空気の淀みがほとんどないのは意外だった。どこかの窓が開け放しにされているせいで、換気はされていたのかもしれない。しかし人が住んでいないだろうということは一目瞭然だった。

佑は無言で靴を脱ぐと、家の中にあがりこんだ。レイもまた彼の背を追う。一応「おじゃまします」と小声で断るが、人の気配が現れることはなかった。

色の褪せた廊下には不穏な気配が色濃く漂っていた。誰かから見られているような、誰かに話を聞かれているような、そんな気がする。視界に収まる範囲でもいくつかドアを認めることができるが、いずれのドアの向こうにも何かが潜み、耳をそばだてている気がしてならない。足を進めていくごとに、掌の汗はその量を増していつ

た。前を歩く佑の横顔もひどく険しい。その呼気が震えている。動きもどこか固かった。

「感じる？」

前方に注意を向けたまま、佑はレイを気遣うように尋ねてくる。

レイは周囲をきよるきよると見回しながら唇を舐めた。

「はい。怪人の、気配がします」

「やつぱり……レイちゃんを連れてきて、正解だったよ」

足元で床の軋む音が鳴る。どこかでしきりに何かの家財が風で揺すられるような物音がする。しかしそれが人の出している音でないのは明白だった。おそらくどこかの窓が開いたままなのだろう。周囲が静かなので、些細なそれらの音もはつきりと耳に届く。それは、左手側にある、玄関から一番近いドアの向こうから聞こえてきた。

レイが視線をやったそのドアに、佑が手をかけた。自分の判断が正しいのか確かめるかのようにこちらを振り返る彼に、レイは緊張しながら頷く。

佑の判断は正しい。心臓をぐいと掴まれるような、この巨大なプレッシャーの根源がこのドアの向こう側にあるのは確かだった。おそらくこの気配を発している何かは、部屋に入ってこようとする憐れな獲物を待ち、室内に鎮座している。その気配が痛いほど、手に取るように伝わってくる。

佑はドアノブに手を添え、もう一度レイを振り返り、頷いた。レイは緊張の面持ちで頷く。事態に備え、全身の感覚を研ぎ澄せる。

佑はドアを押し開いた。レイは彼に続く。

部屋に入って、まず視界に飛び込んできたのは、ひどく荒らされたリビングだった。テーブルは割れ、キャビネットは碎け、カーペットは切り裂かれている。ガラス戸は破壊され、その破片は室内に飛散している。補修した形跡もなく、部屋の中は吹きさらしの状態だった。

室内には破壊の跡が色濃く刻まれ、そしてそれらは明らかに戦闘の痕跡があった。ドアの近くで立ち尽くし、日常をあますことなく

奪われた部屋を見回すレイをよそに、佑はどんな部屋を奥へと進んでいく。ひどく鋭利な刃物で一息に両断されたかのような、非常に整った断面を晒すテーブルを佑は懐かしそうな表情で見つめている。

「もしかして、ここで……」

「ああ、オウガと戦った」

やはり、とレイは改めて室内を見回す。ここで佑とオウガは出会ったのだ。そして戦った。おそらくその争いは、仕掛けた佑にとっても、仕掛けられたオウガにとっても不本意なものであっただろうと思った。ただ、傷つきはしても互いに命を落とさぬ結果に終わったことだけが救いだらう。

そんな思いを抱きながら室内を観察していたレイは、乱雑に散らかった床の上のあるものにふと目を止めた。それは絵本だった。表紙にかたつむりの絵が描かれている。題名は『いとまきまきかたつむり』と書かれていた。

4年前に黒い鳥から生まれ、幼少時代というものを持たないレイは絵本に触れたことがこれまでなかった。レイはそれを拾い上げると、その表紙をまじまじと見つめたあとで、裏に返した。そこには油性マジックの幼い文字で『なたはしそら』という名前が書かれていた。おそらくこの絵本の持ち主の名前だろう。この家に住んでいたのかもしれない。絵本はひどく汚れていて、ページのほとんどは抜け落ちているようだった。中身も酷く痛んでいて、とてもではないが読むことはできない。

レイは絵本を割れたキャビネットの上に置くと、部屋の奥にいる佑を目で追った。レイたちが今立っている床はフローリングであったが、奥の方は畳みに変わっていた。その境界付近に穴のあいた襖が倒れている。どうやらもともとこの部屋は、襖で2つに区切られていたらしい。

その畳の空間を見つめる佑の表情がさらに陰しいものへと変わる。レイは彼の表情が気にかかり、ようやく部屋の内部にまで歩を進め

た。

佑のすぐ背後に立ち、彼の視界の先に広がる空間を覗きこむ。途端に、激しい腐臭が鼻を突いた。その臭いの鋭さに思わず顔をしかめ、それから絶句した。

「これって……」

その部屋が畳敷きの和室であることが分かるのは、フローリングとの境界付近だけだった。部屋の奥は畳の生地など全く見えず、その床は真っ黒な鳥の羽で、一色に塗り潰されていた。

おぞましさをすら感じるほどの、凄まじい量だった。背筋にぞくりと寒気が走る。脂で照り、薄気味悪く滲んだ光を放つ生き物の羽がこれほどまでに密集している光景は、ただひたすらに不気味でしかなかった。

それは鳥の羽根などではけしてない。レイには分かった。それは黒い鳥の羽。怪人を生み、人間の命を吸う。漆黒の羽毛に体を包んだ、恐ろしい怪鳥のものに違いなかった。

佑が見せたかったのはこれだったのか、とようやくレイは彼が自分をここに連れてきた理由に気付いた。これはどう見ても鳥から偶然抜け落ちた、という規模ではなかった。誰かが意図的に鳥から羽を引きちぎり、部屋に撒いたのだ。そしてそんなことが可能な人物は、レイの知る限りで1人しかいなかった。

「式原……」

その男の名前を呟いたその時、レイは脳に鋭いものを刺し込まれるような痛みを覚えた。たまらず目元を掌で覆い、苦痛に顔を歪める。大量の映像と音声が入の頭に直接なだれこんできて、巨大な螺旋模様を描く。それは間違いなく、怪人の接近を知らせるサインだった。

来る。すぐ近くだ。佑にその事を伝えるよりも早く、窓際に置かれたソファが宙を舞った。ソファは壁に激突し、衝撃音とともに埃が一斉に舞い上がる。続けてフローリングを引っ掻く音が室内を疾駆し、それから異形のシルエットが白ばけた景色の中から現れ

た。

それは顔面から折れた扇風機を生やした、奇妙な姿の怪人だった。体中に傷を作り、右腕などあらゆる方向に完全に曲がっている。全身には血管じみた黒色のラインがあますことなく引かれていた。獣の咆哮のような唸り声を響かせながら、それは2人の前に立ちはだかる。身の丈は2メートルを超え、そのほっそりとした姿も相まって大蛇に鎌首をもたげられたかのような迫力がある。

「怪人……」

怪人を前にし、レイと佑、2人の言葉は重なった。レイは身構えた。それから自分の影を鳥の形にそつと変化させようとする。しかし実際に影の形が人のものから離れる前に、礼を庇うように、佑が一步、足を踏み出した。

「お兄さ……」

「怪人」

レイの言葉を遮り、佑は目の前の怪人を睨みつける。その表情は険しく、その瞳は爛々と輝いているように見えた。そのあまりに冷たい横顔に、レイは背筋に怖気が走るのを感じた。彼の目の色が明らかに違っている。その表情に深く淀んだ影が射す。

「怪人！」

歯を軋ませ、憎悪を瞳に宿し、佑は手に握っていたフェンリルのメイルプレートとを、床に転がっていたキャビネットのガラス戸に叩きつけた。あまりに強くプレートで殴りつけたのでガラス戸は割れ、金具がもとから外れて、戸自体が窓際の方に吹き飛んでいった。

怪人は甲高い唸り声をあげると、顔に刺さった扇風機をがちゃがちゃいわせながら、佑に向けて飛びかかった。テーブルを踏み碎き、床を引っ掻き、立ち塞がる障害を力尽くでなぎ倒しながら突き進む。その場から一步も動こうとはせず、ただひたすらに怪人を睨み続ける佑に、怪人の右腕の先から伸びた鋭い爪が迫る。

その爪が佑の体を貫く寸前、キャビネットの割れたガラス戸の内より銀色の装甲片が次々と飛び出し、佑の体を順々に包み込んでい

った。

装甲片によつて攻撃を弾かれ、怪人は後ろにのけぞる。全身を揺らすようにしてバランスをとり、再び腕を振り下ろすが、それもまた飛来する銀色のパーツが阻んだ。そうしているうちに佑の体はむらなく装甲片によつて覆われ、『5』の数字を刻んだ戦士、“フェンリル”がそこに顕現した。

フェンリルの内より放たれたその声は、ほとんど怒号だった。憎悪によつて彩られたその叫びに、レイは身を凍らせる。自分の前に立つこの銀色の戦士が佑だとは到底思うことができない。俺がいるから大丈夫だよとレイの手を握り、恐怖に震える体を宥めてくれたあの優しい笑顔を浮かべる彼はどこにいつてしまったのかと当惑する。継るようにフェンリルの手に視線を移すが、そこにあるのはいかにも冷たそうな、金属製の装甲だけだった。

「お兄さん！」

急激な不安が胸に殺到し、たまらず佑の事を呼んだ。だがフェンリルにその声は届かないようだ。彼は何事かを唸るように叫ぶと、その足首から三日月型の刃を発生させ、三度迫りくる怪人目がけて回し蹴りで応戦した。

蹴りの辿った軌跡に添って、空を刃が裂く。フェンリルの右踵で刃は高速回転し、それは怪人の爪がフェンリルを貫くよりも早く、その肩を確実に抉った。床に腕を突き刺し、金切り声をあげる怪人を前にフェンリルは、その肩に食い込ませたままの刃ごと足を水平に動かし、まるでカッターでデコレーション・ケーキを切るように怪人の肉を裂いていき、そのままその片腕を何の躊躇いもなく切り落とした。

その瞬間、怪人の口からこの世のものとは思えぬ、おぞましい悲鳴があがった。鼓膜が否応なしに震え、全身の肌が粟立つようだった。フェンリルは踵でとん、とんと床を叩き、刃にこびりついた桃色の肉片を振り落とす。それから今度は背中より、先端のみ黄色に着色された装飾付きの剣を引き抜いた。

怪人は残った腕で体を支えながら、苦悶の声を吐き出す。フェンリルは右手首からも足と同様の三日月型の刃を出現させた。刃はその場で縦方向に、まるでスイッチを入れたドリルのように高速回転を始める。回転から生じた螺旋状のエネルギーは手首を這い、指を伝って、その手に握った剣を柄の方から浸食していった。

「死ね」

その佑とは思えぬ装甲服の戦士は、しかし確かに佑の声で怪人にそう吐き捨てた。怪人が身を起こしたそのタイミングに合わせて、フェンリルは螺旋状のエネルギーを十分に纏ったその剣を片手で一閃した。

フェンリルが剣を完全に振り抜いた、その後で、今度は怪人の右足が宙を舞った。

半身を失った怪人は今度こそ、よろめくようにして前のめりに倒れた。壊れたラジオの音声のような雑音混じりの声で喚き散らしながら、床をのたうち回る。フェンリルは剣を片手に掴み、その先端を床に引きずるようにしながら怪人に歩み寄る。顔面から生えた扇風機の隙間から覗く怪人の2つの目が、助けを請うようにレイの方を見た。

レイは息を呑み、後ずさりながら、体を震わせた。怪人の赤く爛々と輝く瞳は憎々しげに、疎ましげにレイを睨んでいた。

お前も同じ怪人なのに、なぜ自分だけがこれほどまでに無惨な仕打ちを受けなければならないのか。怪人の目はそうレイに糾弾を投げかけている。それを分かっているながら、レイは一步もその場から動く事ができなかった。

怪人に迫るフェンリルの背姿を、恐る恐る見やる。まるで対峙するものに恐怖を与えることを目的とするかのように剣と床とが擦れ合う音と連れ合って歩きながら、フェンリルは一步一步、着実に怪人の精神を追い詰めていく。その脂で光る剣を、怪人の肩を抉った、回転する刃を見つめていると、レイは目眩を覚えた。その武器が自分の体を裂き、貫く瞬間をイメージすると、頬が冷たくなり、震え

が止まらなくなった。

「お前らなんか、この世にいないんだ。怪人なんか、みんな消えればいいんだ」

暗く、低く、佑が漏らしたその言葉にレイは心臓を驚つかみにされたかのような気持ちになった。口の中が急撃に乾く。頭の中が真っ白になった。そのセリフはレイに向けられたものではないと分かっているが、それでも、レイはまるで自分の生そのものを否定されたかのような気分になり、胸の鼓動が高く跳ね上がった。

フェンリルは怪人の頭を踏みつけた。くぐもった悲鳴をあげ、床に顔面を押しつけられる怪人の喉元に剣先を突き立てる。レイは顔を背けた。次の瞬間、肉を抉る鈍い音と重なって、怪人の絶叫が室内にこだました。

レイは目を閉じ、耳を塞ぎ、目の前の光景から逃げた。

それでも指の隙間から聞こえてくる肉を裂く音、骨を潰す音、この世の苦痛を全て引き受けたかのような悲鳴。閉じた瞼の端から見える、体から肉片が抉りとられる光景。細かな破片になって宙を舞う怪人の体。悲鳴。絶叫。手足が削がれ、爪をへし折られ、眼球を床に垂れ流す。悲鳴、悲鳴、悲鳴。

それがようやく鳴りやんだ時、レイは吐き気を堪えるので必死だった。生きた心地がしないまま、何かに操られるようにして目を開き、耳を押さえていた両手をだらりと脇に垂らした。呆然と目の前の景色に視界の焦点を合わせる。そこにはすでにフェンリルの装甲を解除した佑が、レイを振り返り、微笑みを浮かべていた。

「レイちゃん、終わったよ」

そこにはもう怪人の姿はなかった。ただ、つい数刻前まで怪人であっただろうと何とか判別できる、肉の残骸があった。レイは虚ろな意識のまま、顔の半分を切り取られた怪人の生首に目をやり、それからよろよると背後の壁に寄りかかった。現実感がまるでなく、意識は夢の中にあるようだった。足下がふわふわして、まともに立つことができない。

佑はフローリングに撒かれた桃色の肉片を足で払うようにしながら、もう1度、まるで自分に言い聞かせるかのように言った。
「終わったんだよ。もう大丈夫だ。怪人は、俺が殺したから。だからもう安心していいよ」

呪文のように呟き、怪人の残骸を背後に、佑は口元を綻ばす。レイは彼の方を一瞥し、その表情を視界に収めた瞬間、背筋にうそ寒いものを感じて、すぐに視線を床に転じた。

佑に笑って欲しいとあれほど望んでいたはずなのに、その表情が好きだったはずなのに、レイは今の彼を直視することができなかった。彼の浮かべたその笑顔に魅力的なものを感じることはできず、ただ胸の内にはうす気味の悪い感触が渦巻くばかりだった。

鎧の話 34

公園に生え並んだ灌木の影に、直也とライは身を潜めていた。

猫の額ほどの小さな公園だ。遊具も錆びたブランコと、土を被ったシーソー以外にない。見上げた空に、飛行機雲が横切っていく。蝉の声も気付けば大分小さくなった。夏も終わりに向かっているのだ、という空気が、何とも寂寥感を誘う。

直也は顔を掌で拭うようにし、それから一度、目を強く閉じて開いた。先ほどから眩暈が止まらない。病み上がりであればほど激しい立ち回りをしてしまったがために、熱がまた上がってしまったのかも知れない。今、あの怪人に見つかれば今度こそ逃げ切れる保証はなかった。

直也は靴を片方しか履いていない自分の足を見やり、嘆息した。怪人の攻撃から逃れるため、仕方がなく脱ぎ捨ててしまった。乗ってきたバイクも店の外に置いたままだ。大学時代から乗っていた愛車であったし、この状況で足を失うのは痛手ではあったが、取りに戻るのにはあまりにリスクが高かった。柳川たちの死体を放ったままで

あることも、どうにも気に懸かるが、今は致し方なかった。直也だけなら迷うが、ライと一緒にいる以上、道義に反しても彼女を守る
ことが優先だ。

「あいつ、撒けたかな」

ぜえぜえと呼吸をしながらライがあたりを見回す。直也もまた灌木に指を入れ、視界の限りを探った。

「さあ、どうだろうな。気配はないみたいだけど」

日陰に覆われた、乾いた地面に並んで座りながら、2人そろって肩で息をする。周囲に意識を傾けるが、あの怪人が近づいてくるような気配はなかった。油断こそできないが、今はしばらくここで息を潜めているのが最良の選択だろう。

「どうするんだよ、おっさん。110番するならケータイ貸すけどさ」

直也の耳に口を寄せ、息を切らしながら途切れ途切れにライが囁いてくる。彼女の表情にもやはり疲労が色濃く浮き出ているようだった。直也はライの方を見やると、体調不良のせいで重苦しいため息を吐きだした。

「警察に連絡してもどうにもならないだろ。これ以上、事を大きくしても被害者が増えるだけだ。相手は人間じゃない、怪人なんだ」
「そっか……」

蚊に刺されたのか、腕をぼりぼりと音をたてて掻きながら、ライは顔を伏せる。そのうつすらと紅潮した頬を見つめ、直也は先ほどのことを思い出してふと頬を緩めた。

「そっぴやさつきはナイスだったな。お前に助けられるなんて思わなかった」

ライは目を細めて直也を見る。それから数秒記憶を辿るような仕草を見せてから、ああ、と得心のいった風な声をあげた。

「あれはさ、ハンマー投げみたいな感じで投げたら当たったんだ。このままじゃおっさんが死んじゃうって思ったらさ、勝手に体が動いてたんだよ。あれが火事場の馬鹿力って奴なのかも」

「馬鹿力か…… お前らしいよ。何にせよここまで逃げてくれたのはお前のおかげだ。助かった」

今、口にするのできる精一杯の褒め言葉をかけると、ライはへへへ、と照れくさそうに笑って、自分の両膝を抱きかかえるような姿勢をとった。

直也もまた口元を緩め、それから息を深く吐き出した。汗が止まらず、一向に呼吸が楽にならない。人間は1週間床に伏しているだけで、これほどまでに体力が落ちるのかと痛感した。体力には自信があっただけに、たった数十メートル走っただけで息を切らしている自分が、ひどく惨めに思えた。

直也とライは錆びたフェンスに寄りかかるようにして、青々と茂った灌木を挟み、公園側を向くようにして腰を下ろしている。背後で自転車が通り過ぎた。車の走る音も絶えず聞こえてくる。ここならば怪人もあまり大っぴらには襲ってこられないだろう。怪人は人の目を恐れているような節がある。日中、人通りの多い場所にいる限りは、おそらく安全だろうというのが直也の見立てだった。

「でもあいつ、一体なんなんだろうな。私と似たような顔しやがって。あんなのパクリじゃん。言ってることも、わけわからないし」
足に止まった蚊を叩きながら、ライは口を尖らせる。直也はそんなライのつまらなそうな表情を　あの怪人とまったく同じその顔を、現実感の欠いた思いのままに見つめた。

「でも似てるのは顔だけだったな。あとは全然違う」
「当たり前だろ！　私は私だよ。人の顔の真似しやがって。許せないよ」

ライは本気で憤慨しているようだった。怒ってはいるものの自分の写し身が現れ、怪人に変貌したことに対し、恐怖や不安を抱えてはいないようだ。そのことは直也の心を少しだけ安堵させた。ライは自分自身をちゃんと持っている、その強さは、直也も見習いたいところだった。

直也は全身の感覚を研ぎ澄ましながら、フェンス越しに歩道を見

つめた。やはり迫ってくる気配はない。樂觀こそできないが、もうこの周辺にはいないのかもしれないと思い始めた。だが、敵の動きが全く予測できないだけに迂闊な行動をとるわけにもいかない。直也は頭上で喚き始めた蝉の音にわずかに顔をしかめつつ、フェンスに視線を這わせる。

「おっさん」

声をかけられ、直也は警戒を解かぬよう自分に言い聞かせるようにしながら、ライの方に顔を向けた。

するとライは顔を俯かせ、思い詰めたような表情をしていた。先ほどとは一変した顔色に直也は当惑し、眉根を寄せる。

「おい、どうした」

慌てて声を投げかけると、彼女は地面に視線を落としたまま、ぼつりと呟いた。

「……あの人たち、死んだんだよな」

直也は言葉を詰まらせた。ライの横顔はいかにも悲しげで、深い影が頬のあたりに射し込んでいた。

「あの化け物に、殺されたんだよな」

状況を再度確認するかのようにライは唱え、それから膝の間に顔をうずめた。直也は少し考えてから、フェンスの方に顔を戻した。

「ああ、そうだな。殺された。柳川さんも、マスターも、他の客も」

「人が死ぬって、怖いんだな。あそこで死んでいた人たちのこと、私は知らないけど。それでも残念だな、って思う。悲しいな、って思う。許せないなって……そう思う」

ぼつりぼつりと喋るライの声音に涙が滲む。その頬に透明の滴が滑り落ちていった。

柳川と親交の深い直也ならともかく、ライは柳川の名前すら今日初めて耳にしたはずだ。あの店のマスターや床に倒れていたカップルらしき男女のことも、もちろん知己ではないだろう。それなのにライは、声を震わせ、目に涙さえ浮かべて、彼らの死を心から悲しんでいる。彼らの無念を悼んでいる。目を赤くし、下唇を噛む、そ

んなライの姿を見つめているうち、直也は自分の中に優しい気持ち
が溢れ出してくるのを感じた。温かいものが臓腑を柔らかく満たす。
それは心地のいい響きを直也の胸に与えてくれた。

「お前、優しいな」

ありのままの気持ちを伝えたと、ライはちらと直也を見て、膝の
間に顔をうずめた。

「普通だよ。なんで人の命を奪って平気でいられるのか、私にはわ
かんない。分かりたくもない。私と同じ顔をしてるくせに、わけわ
かんないよ」

「ああ、それは俺も同感だ」

手垢のついた表現ではあるが、命の価値は重い。かけがえのない
程に。代替えができず、釣り合うものさえ見当たらない程に。

命は個の証明であり、それぞれの個は唯一無比の存在である。いか
なる命であろうとも、他の命で埋め合わせるなどできない。同
一の容貌をもつライとあの怪人が、しかし、まったくの別物である
ように。同じ直也と恋人同士という関係を築きながらも、咲のいな
くなった空白を、あきらで埋めることなどできないように。

だから命を奪うという行為は許されない。死はこの世に2つとして
ない個の、完全なる消滅を意味するからだ。それが無差別と無秩序
を纏ったものであれば尚更だ。だから直也は人を殺め、自らの私欲
を満たそうとするあの白衣の男を、それを忠実にこなす怪人を憎む
咲や太田を殺したフェンリルに怒りを覚える。そんな奴らを野放し
にしておくことが許せなかった。

「柳川さん……」

あの大らかで世話好きな警察官は、もうこの世にいない。柳川と
は3年たらずの付き合いではあったが、S I N エージェンシーの事
件では言葉では語りつくせないほど世話になった。彼の存在がなけ
れば直也はいつまでも咲の死を引きずっていただろうし、事件の解
明も今よりも進展していなかったに違いない。

悲しみに暮れるライを見ているうち、もう柳川と話すことはでき

ないという実感が徐々に込み上げてきて、直也の胸を衝いた。全身に怖気のようなものが走り、途端に喉元まで熱いものがこみあがる。だが直也は鼻を伝い、目にまで及んでいこうとするその感覚をすんでのところで呑み込んだ。咲の娘が隣にいる手前、悲観に暮れることは躊躇われた。

「なんで、あの怪人はみんなを殺したのかな」

ライは曲げていた足をずるずると伸ばし、つま先でフェンスに触れる。その指先を細かく動かし、フェンスの網目を揺らしている。

「断言はできないけど、多分、あの封筒の中身だろうな」

柳川から送られてきたリーフレットを頭に思い浮かべながら直也が返答すると、ライは弾かれるようにして直也の方を向き、目を丸くした。

「中身って……あの、わけのわからない広告？」

「ああ。あの広告と怪人が何らかの関係で結ばれていたのは間違いない。あの広告の意味までは、さすがに俺もわからないけどな」

黒い鳥のマークから旧鉤橋邸で出会ったあの男との関わりがあることは確かだったが、“リリー・ボーン”という単語が意味するところまでは、直也は行き着けていなかった。

「あのおまわりは、あの広告の意味を知っちゃったから殺されたって、そういうこと？」

「マスターや客は巻き添えだろうな、多分。柳川さんは何かを知って、それは怪人たちにとって知られたくない何かで……だから、殺されたんだ」

柳川はおそらく刑事独特の嗅覚で、己に迫る危機を嗅ぎ取っていたのだろう。あまりにも危ない境地に、自分が足を踏み込んでしまったことにも感じていたに違いない。

「柳川さんは一体、どこであの広告を手に入れたんだ」

その時、直也はふと思いつき、尻をわずかに浮かせてポケットからくしゃくしゃの紙を取り出した。興味をそそられたのか、ライが横から直也の手元を覗きこんでくる。

「なにそれ？」

「柳川さんの手にこいつが握られていたんだ。たまたま持っていた感じじゃなくて、ポケットから慌ててこいつを握ったみたいだった。もしかしたら、柳川さんはこいつで俺たちに何かを伝えようとしたのかもしれない」

直也は指先でその小さな紙を広げ、皺を伸ばした。それはレシートだった。上部に全国チェーンのコンビニの名前が記されており、その下に支店の名前と電話番号、そのさらに下にはガムと煙草を買った明細が記されていた。日付は今日の7時になっている。

ざっと見た限り、その紙に特に不審な点は見つからなかった。ひっくり返し、裏面に目を走らせるが、何かが書かれているわけでもない。太陽に透かしてみるが、何か文字が浮かび上がるというようなこともなさそうだ。

だが、直也は自分の閃きを信じた。レシートに刻まれた皺の跡が、柳川の苦痛の程を物語っているようだ。ところどころ印刷された文字が白い線で消されているのは、柳川が爪で引つ掻いた跡なのだろう。紙面の至る所に残されたそれらの痕跡を眺めていると、彼が死の瞬間まで感じていた痛みと、直也に何かを伝えようとする気持ちの否応なしに伝わってきて、胸が絞めつけられるようだった。

「じゃあ、ここに行ってみようよ」

ライがあっさりと言いだすので、直也は耳を疑った。よいしょ、と声をあげながら彼女は立ちあがる。尻に付いた泥をはたく姿を見上げ、そこでようやく直也は慌てた。

「おい、お前待てよ。……本当に、いいのか？」

「いいだろ。こんなところでじっとしてたって仕方ないじゃん。どうせ私たち、怪人に目を付けられたんだし」

自分を見下ろすライの何の迷いもない目に、直也は二の句を継げなくなる。躊躇う直也を前に、ライは眉を曲げ、少し悲しそうな表情を作った。

「あのおまわりは、おっさんに命がけで何かを託そうとしたんじゃない

ないか。だったらそれを受け取ってやらなきゃ、報われないよ」

「……そんなこと、分かってる」

直也も立ち上がった。視界が一瞬暗転し、足元がふらついたが、大きくバランスを崩すことはなかった。フェンスに指を引っかけ、姿勢を保ちながら、ライと向き合う。

「だけど、さつきも言っただろ。柳川さんは何かを知って殺されたんだぞ。これ以上深入りすれば、お前も危ないんだ」

「でも、おっさんは行くんだろ？」

直也の忠告に、ライはあっさりと言葉を返した。彼女の言う通り、直也は当然のことながら柳川の残したこのレシートを辿り、“リリイ・ボーン”の正体について探るつもりだった。1人ならば今頃、とっくにコンビニに向かっているだろう。

しかし動き出すことができないのは、これ以上ライを巻き込むことに躊躇いがあるからだ。彼女を危険に晒すわけにはいかないという感情が邪魔をしている。単独で動いている時よりも直也は自分が臆病に、そして慎重になっっていることを明確に感じ取っていた。

「おっさんがこんなところで引き下がる人じゃないの、ちゃんと分かっているよ。私もそうだよ。私も無関係じゃないんだ」

ライの表情は真剣そのもので、面白半分に首を突っ込もうとしているわけではけないことは明らかだった。彼女は立ち向かおうとしているのだ。自分と同じ顔の怪人が引き起こした、このあまりにも許し難い事件に。自分が関わってしまった、このとんでもない事態に。真正面から、向き合おうとしている。彼女の強い気持ちは、その眼差しは、直也の心を決定づけるには十分だった。

「だから、頼むよおっさん。足手まといになるかも知れないけど、だけど、私も連れてってよ。頼むよ」

ライは頭を下げて、直也に懇願する。確かに怪人に顔を見られている以上、ここでライと別れ、彼女を1人にするのは少ナリスクが高かった。こんな時に拓也がいてくれれば、と思うが彼の居場所も連絡先も分からない以上、どうにもならない。黒城のもとに帰すの

にも抵抗があつた。黒城は頼りがいがあり、この状況を打破してくれそうではあるが、さすがにあの男といえども怪人相手では分が悪いだろう。

結局、自分の側に置くのが一番安全なのか、と直也はこちらを上目遣いで窺うライを見つめながら思う。あまりに頼りない力ではあるが、一応、怪人と戦うための力を直也は持っている。

直也はため息を浮かべると彼女の肩を軽く叩いた。顔をあげるライを見つめ、そして直也はその瞳に、咲の面影を重ねる。この少女は絶対に自分を守るのだと改めて心に誓う。

直也はライと向き合いながら、ジーンズのポケットからメイルプレートを取り出した。不思議そうに直也の行動を見つめるライに、それを差し出す。

「こいつは咲さんがいなくなる直前、俺に託したものなんだ」

救急車の中のストレッチャーに横たわる咲の白い顔が思い出される。その首筋に刻まれた鳥の形をした痣が目の前に浮かぶ。このプレートを直也に託してくれた時の、あの細い指が脳裏にこびりついて離れない。

「俺は咲さんにお前を任されたんだ。だから俺は、必ずお前を守る。絶対にだ」

ライは彼女らしくないおずおずとした動作で直也の手からプレートを受け取ると、その傷だらけの金属を眺め、「母さんが」と呟いた。

「ライ、お前には俺と咲さんがついてる。だから、心配するな」

ライは直也にプレートを返すと、こちらを見上げ、それから強く頷いた。その目がわずかに赤みを帯びているのを認めて、直也は胸にわずかな痛みを覚える。

空にはまだ太陽が高く昇っている。怪人が積極的に動きをみせるであろう夜になるまで、まだ時間は残されていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2409w/>

DEVIL HEART ruined 第3幕

2011年10月10日03時27分発行